怪盗ジゼルの慌しいお仕事

神崎ミア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
怪盗ジゼルの慌しいお仕事

【Ｎコード】
Ｎ３１０１Ｙ

【作者名】
神崎ミア

【あらすじ】
颯爽と姿を現し、その美しい容姿から人気を博す大泥棒ジゼル。その夜の顔を持つ少年春斗は、大胆不敵なジゼルの姿からは想像できない所謂ヘタレな少年だった。ジゼルの目的は美術品に憑依した悪魔を祓う事。今夜も闇夜に現れるジゼルだが、その先々には様々な困難が待ち構えていて…？！

プロローグ

「いたぞ、逃がすな！」

黒く、細長い影が一筋伸びている。それはとても人が立てるような場所ではなく、その人物の運動能力の高さが伺えた。
何しろ彼がバランスよく立っているのは美術館の屋上の更に頂上に聳える、旗の上。ようやくつま先が旗のてっぺんに乗っているという状態だ。
旗の下にはぐるりと警官、警備員が取り囲み、美術品を抱えている少年は正に絶体絶命といった所だろう。
だが表情には微塵もそんな気配を持たず、静かに獲物を見定めるように取り囲んだ複数の大人たちを見下ろし、少年は息を少し吸い込んで小型マイク越しに高々と告げた。

「どうも警察、並びに警備員の皆様方、今宵も役に立たない狂犬病の犬のような顔をぶらさげてご苦労様です」

少年がそう告げると周りが反論しているのかざわめく。だかそんな声など全く届かないかのように涼しい顔で少年は続けた。

「わたくしジゼルは今回お仕事を完了しましたのでこれで失礼致します」

とん、とつま先に力を入れて、少年は背中から自ら警備員達の群れに飛び込ように落下してゆく。

呆気に取られていた彼らを尻目に、どんどん降下した少年はゆっくりと体制を整え、ふざけるように敬礼してパッ、と煙のように姿を消してしまった。

旗の周りには無数の警官、警備員の海。ここから逃げられるはずもないと捜すように指示を飛ばすそれぞれの指揮官。だが人数が逆に混乱を招き、その日もまた、ジゼルは深い暗闇に姿を消したまま現れることはなかった。

怪盗ジゼルの慌しいお仕事

「おい、聞いたかよ、昨日のジゼルの事！」

朝。

健全な高校生が起きて真っ直ぐ登校している時間。既に学校に着いて今日の授業内容を確認していた吾妻春斗（あがつま はると）は、同級生の桂木慧（かつらぎ あきら）に突然声を掛けられて苦い笑みを浮かべた。

彼の両手にはどこから入手したのかジゼルの愛らしい姿のフィギュア。そしてブロマイドが握られている。

その両方に嫌な視線を送って、春斗は小さく頷いた。

「うん…新聞部が号外配ってたね、貰ったよ」

「おっ、見せてくれよ！俺当番で早かったから貰ってねぇんだ！」

慧は根っからのジゼルファンで、彼が怪盗として名を馳せる前から

の古株だ。恐らく両手のグッズも、そのファン同士の交流で手に入れたものだろうが、慧は一つだけ勘違いをしていた。それもファンあるまじき所なのだが…

「それにしてもジゼルちゃん…可愛いよなぁ！俺もこんな彼女欲しいなー」

「…そう…かな」

ジゼルの性別は格好が格好だけに、判別しにくいが大体のファンは男であることを知っている。にも関わらず女性だと勘違いしている友人に、男であると指摘して幻滅させることも出来ず、こうして何年も女性だと信じ込んで崇めているのだ。

その正体こそ、眼前の大きな眼鏡をかけて長い髪を一つまとめにしたやぼったい少年であるとも知らずに…。

「次…何処に現れるのかなー俺、一度でいいから生のジゼル見てみたいんだ！」

「えっ、やめておいたほうがいいんじゃない？！」

「何でだよ、ファンサークルでも出没場所を特定するのが難しいらしくて、俺には情報回ってこないしさー…あー家に何か盗みに来てくれないかなー何もねぇけど」

「き、きっとがっかりするよ…やめておきなって…」

「なにぃ？春斗まさかお前…」

急に声のトーンを下げ、詰め寄ってきた慧に一瞬ドキッと心臓を振るわせた春斗だったが、この鈍感な慧が春斗の正体に気づくはずもなく。

「ジゼルのファン…なんだろ？」

「へっ…？」

「なあ教えろよー！次、何処に現れるのか！」
「し、知らないってば！ファンでもないし！」
疑るような視線で見つめられ、どう話を切り替えるべきかと困っていると、春斗の携帯電話が突然音を鳴らし始め、これ幸いと春斗は急いでポケットの携帯を取り出してディスプレイを見る。
そこには大きく、吾妻海斗（あがつまかいと）と表示されていた。

「に…兄さんからだ…もしもし」
『今すぐ走って息を切らして三年棟まで来い、以上！』

ブツン！と用件を数秒でまくし立てられ、通話を一方的に遮断された春斗は、少し呆然と携帯を眺めていたが、やがて深いため息と共に椅子を引いて席を立つ。
慧は早すぎる通話に驚きつつも、退室しようとする春斗を呼び止めた。

「おいっ、何処行くんだよ?！ＨＲ始まるぞー」
「ごめん、兄さんからの呼び出しなんだ、適当に言い訳しておいて」
「あ、おいっ、春斗！」

慧の呼び止めにも振り返らず、教室を走って出て行った春斗の背中を見つめ、慧は呆れたように一言呟いた。

「ま…あいつの兄ちゃん変だしな…」

第一章　海の女

海斗からの呼び出しから数分、指定した通り三年棟まで息を切らして走ってきたジゼルだったが、待っていた相手はそれでも不足、といった様に不機嫌そうな顔で仁王立ちしていた。
彼を一言で形容するならばあどけない少女。
真っ白な肌に淡い髪色。そして大きなくりっとした両目は今はやや怒りによって釣り上がっていて、それすらも愛らしい。改造した制服を着用しており、胸には女子用リボン、スラックスの代わりに半ズボン姿でこれも特注品。身長は背の高い春斗の半分もないのではないかと言うぐらい小さく、つい守ってあげたくなる容姿だろう。
彼こそ、春斗の兄、吾妻海斗なのだが、一見すれば海斗が弟にしか見えない。
不機嫌な様子の海斗に、春斗は恐る恐る尋ねた。

「ごめん…待った？」
「ったく、この俺様を待たせるなんて随分偉くなったもんなだなー？いいから人少ない場所に移動すっぞ」
「もしかして仕事のこと？」
「そうに決まってんだろ、俺がお前にそれ以外の用事で何の理由があるってんだよ、いいからとっととついてこい」
見た目の可憐さからは想像できないような粗雑な言葉でそう返し、海斗は歩き出した。
怒っているのもそうだったが、仕事、という一言で春斗の気持ちはぐっと下がり、小さな背中を見つめて決心したように声を上げた。

「やっぱり僕…嫌だよ…」
「あぁ？何がだよ？」
「そのっ、…泥棒するの…」
「はあ…お前な…この仕事は、誰かが必ずしなきゃなんねーんだよ、5代目ジゼルを継いだ以上、お前はこなす義務があるだろうが」
「そう…だけど…」
「あー！うぜぇ！ぐちぐちぐちぐち女々しく反論してくんじゃねえ！黙れ、殺すぞ！」

見た目のギャップがやはり拭えないが、中々迫力ある声でそう脅され、肩を震わせて黙ってしまった春斗に、海斗はため息をついて再び春斗に背を向け、廊下を睨む。

「泥棒じゃねぇ、そう考えたらいいだろうが」

海斗なりの優しさで声を掛けたつもりだったが、その言葉に暫く逡巡していた春斗は口を開き、でも、けど、だって…と続けるものだから、気の短い海斗は青筋を立てて春斗の上着を引っつかむ。

「あーーーもう黙れ！やっぱり反論すんな！俺お前がほんっっと嫌い！」

随分正反対に生まれたものだ。血の繋がった容姿の似てない兄を見つめて、春斗は暢気にそう思うのだった。

「今回は星ヶ岳美術館。ここのホールに飾ってある海の女、という絵画を盗む…というより祓う」
「絵画…」
「中々絵がでかいからな…俺が今回もアシストするが、今回は盗む、というより祓うことを優先させろ。祓ってしまえば盗む必要もない」
「そっか…うん…」
「地図はこれだ。予告は今日ポストに投函した。警察にバタバタ動き回って頂いて、ヤツを起こしてもらわなくてはならない」
「わかった」

小さな地図を眼鏡に触れ合うほど近くで眺めて、胸ポケットに仕舞い込む。本番に
強い性格なのか、仕事の最中上がったり、失敗することは少ない春斗だったが、まだ経験が浅い為、海斗が毎回アシストをしている。ジゼルのビックマウスっぷりも、全てマイク越しに海斗が代弁している為だ。

「何かあったら連絡しろ、後はいつも通りだ、いいな」
「うん…わかった…けどさ、いつも警察の方々に啖呵切るのはどうかな…」
「うるせぇな！これは代々ジゼルの口上として伝えられてんだよ、お前もいい加減一人で言えるようになれ！」
「えー？あんなに下品ではないと…」
「お前はほんとうるせぇな！」
「痛い！」

ごちん、と拳で脳天を叩かれ、子犬のように叫んだ春斗に、海斗は再びため息を吐き出す。本当に大丈夫だろうか、毎回ながら思う不安に顔はくっ、としわが寄り、幼い顔が急に大人びて見える。

「ともかく決行は今夜八時。部活あるなら早く切り上げてなるべく誰にも見られず屋敷に帰ってこいよ」

「はいはい」

二話

夜。
大きな月が闇夜にぽつん、と浮かぶ中、星ヶ岳美術館は異様な空気に包まれていた。
高いフェンスの前にはもう閉館しているというのにジゼルを一目見ようと多くの一般人、そして報道者とその車が囲み、館内にはいつジゼルが現れるかと警察が辺りを睨みつけている。
時刻は約束の十二時を回り、美術館の鐘が鳴り響いた。

「皆さん、ライトをこちらに」

高々と、マイクを通した音声が鳴り響き、あっという間にその一言だけで観衆を歓喜させ、大きなどよめきが巻き起こる。ジゼルに当てられた巨大なライトは警察のもので、彼は相変わらず高い位置から登場してみせた。だがその姿はカメラどころか近くに居た警察の目にも映っておらず、周囲を圧倒するその華麗な登場に人々は暫く、ジゼルから目を離せなかった。

「では今宵は、こちらに展示されている、海の女を頂いて参ります」

すっ、と垂直にジゼルは建物の最上階から飛び降り、いつの間に仕掛けていたのか壁のワイヤーを頼りに窓ガラスを突き破ってすぐ下の階に飛び込んだ。
警察達はジゼルが向かった方向に配置していた数人に応援を呼び、ジゼルを捕獲するべく走り出した。
長い髪をさっと振り払い、ジゼルは飛び掛ろうとする警察に何食わ

ぬ顔で催涙弾をぶつけ、そのまま俊敏に駆けてゆく。その速さは催涙弾を浴びせられては到底追いつくことも敵わず、その場にいた警察官数人はすっかり床に伏せてしまった。

「俺、実はジゼル見るの初めてなんだ」

こんな事態にも気づかず、海の女が飾られているホールの警備をしていた警察官二人の話し声が聞こえ、ジゼルはふと足を止める。片方の警官はふぅん、と適当に相槌を打ちながら欠伸を噛んでいる。ジゼルは暫くその二人を見つめ、そっとその場を後にした。

「すみません！」
「ん…？」

そんな二人の前に、まだ若そうな青年が駆け寄る。服装はまだ袋から出したばかり、といった風なピカピカの制服に身を包んでおり、一目で新人だと伺えた。

「実は、俺新人で…どこの警備か忘れちゃったんですけど…俺…何処に行ったら？」
「新人か、新人なら庭の警備だろ」
「しっかりしろよ」
「あはは、すみません、えっと…庭はこっちですね…」
「あ、おい、背中にゴミが…」

新人警官が踵を返すと、その背中から細長い何か紙切れのようなものがぶらさがっており、一人の警官が呼びとめ、それを引っ張り出す。紙には何か書かれているようで、その隣の警官もつい足を止め

てその紙を眺める。

「残念…ハズレ？なんだこりゃ…？」

新人警官、もとい変装したジゼルはニヤリと微笑んで、背後のスタンガンのスイッチを入れた。

「大変です！ジゼルの狙いは海の女ではなく、メインホールに飾られている彫刻だったそうです！至急メインホールに移動してください！」

「何ッ！？やはりこの作品はおとりか！」

変装したジゼルだとも知らず、息を切らしてきたかのような新人警官を見てホールに待機していた警官たちは一斉に駆け出した。元々、海の女の作者は無名で、作品自体に値打ちはない。

そのため、こちらの作品はおとりなのではないか、という疑惑が警察内でも浮き上がり、すっかりそれを逆手に取られたというわけだった。

誰も居なくなったホールで一人、変装を解いたジゼルは巨大な絵画、海の女を見つめて絶句した。

今夜この絵画に憑依している悪魔を祓わなければこの絵画を持っていかなくてはならない。だが抱えられぬどころか、何か大きな機材でも使わなければならないほどの大きさだった。

しばらくしげしげとその絵画を見つめていると、そんなジゼルをず

っと見ていたように声が掛かった。

『随分手馴れてるな』

一瞬、警官かと立ち止まり辺りを見渡したジゼルだったが、その声は自分の目の前から聞こえていることに気がつき、顔を上げる。絵画のすぐ下に小さく体育座りをした男性を見つけて、ジゼルは深く息を吐き出した。

「天野修也（あまのしゅうや）さん…ですね？もう貴方は命が無いことをご存知ですか？」

『知ってる。俺が死んだのはこの作品が描き終った頃だもんな、覚えてるよ』

目の前の男は既に、海斗が調べていた。この海の女の作者、天野修也。

若くして画家としての才能を芽生えさせた修也は、その活躍を世に広めることなく若くして病気にて他界。ここに居る修也は既に人間としての存在を保っておらず、彼のような幽霊が悪意を持って人を襲うようになれば、ジゼル達が呼ぶところの悪魔となってしまう。

一般的には悪霊、といった風に呼ばれているが人間に危害を加える際、その体を自分のもののように内側から蝕む姿がまるで映画に出るような悪魔のような姿に似ている所から、代々ジゼルはそう呼ぶようにしている。

「では…そろそろ成仏なさらないと、貴方はもうすぐ悪魔になってしまいます、僕は貴方のような方を助ける為に怪盗をしているんです、大人しくしてください」

『ゆーれいと怪盗、どーゆー繋がりがあるんだ？まあいいけどさ…

俺はまだここを離れるわけにはいかない、作品が完成するまでは…』
「えっ…？それはどうゆう…」
『じゃあな、怪盗さんわざわざアンタも大変だな。でも俺の絵なんか盗んでくれようとするなんて、わかってるね、アンタ』
「あ、ちょっと！」

すっ、と立ちあがった修也は、そのまま絵画に溶け込むようにして姿を消そうとしていた。
ここで逃がしてしまっては、この絵画を盗んで屋敷に持ち帰らなくてはならない。ジゼルは必死にその腕を掴むように手を伸ばすが元々死人、上手く腕を掴むことが出来るわけもなく、ジゼルはそのままバランスを崩して倒れこむ。絵はまるでそんなジゼルを拒絶するかのように薄い膜を張ってホールは静寂を取り戻した。

「うわっ、何これ、触れないッ！」

絵に触れることすら出来なくなったジゼルが悪戦苦闘していれば、メインホールのダミーがあっけなくバレてしまった為、駆けつけてきた警官が扉勢いよく開き、ジゼルはハッとして振り返った。

「よくも騙してくれたな！捕まえろ、絶対に逃がすな！」
「えええええっ！？ああ、もう今日は引き上げるしかないか！兄さんごめん、失敗した！」

取り押さえようと掴みかかる警官をひらりとかわし、部屋から一番近い窓に向かって突進したジゼルは、そのまま窓を再び突き破り、外に飛び出した。
警備を敷いていた庭は獰猛な警察犬などが叫び声を上げ、宙に浮かんだジゼルを見上げる。
ジゼルはそのまま落下することなく、闇夜に姿を消してしまった。

窓からジゼルのマントを掴もうとしていた警官達は大きな舌打ちをし、無事に姿を残す絵画へと、不思議そうに視線を送るのだった。

三話

怪盗ジゼル、まさかの失敗？星ヶ岳美術館の海の女は無事。

新聞の一面を大きく飾る記事に、海斗は深いため息を一つ、分厚いその新聞紙を見事にくしゃりと握りつぶし、足元で土下座して動かなくなってしまった弟の春斗を見下ろす。

掛けてやりたい言葉は沢山あるが辛らつなものしか浮かばない。そんな言葉を掛けてやりたくもなるジゼル史上稀に見る汚点であったが、小動物のように震えている相手をそう嬲ることも出来ず、やはりその小さな唇からはため息が漏れるばかりだった。

「あのな…。別に美術品を盗まないのはよくあることなんだよ…悪魔か幽霊を祓えばそれでいいんだからよ…でも口上も何もなしに逃げて帰ってきたとあっちゃあ…親父が黙ってないぞ、これ」

「申し訳…ないです」

「はあ…、こんな見出しまで出されて…馬鹿だな！お前、正真正銘の馬鹿だろ！」

ばっ、と顔を上げた春斗の目には大粒の涙が浮かんでおり、心底嫌そうにその春斗の顔を見つめて、海斗は指で背後に来るように指示をする。

「もういい…肩もめ…もう疲れた。お前がホールにいる間眠り薬で警官足止めするのも大変だったんだぞ！」

「ううっ、ごめん…兄さん…。今度は祓ってくるから…」

「ったくしっかりしろよ。表向きは怪盗で派手にやってるけど、俺たちにしかあいつらは目に見えない。活動時間は夜で、調度一年で

この世に未練がある霊は悪魔に成り果てて人を襲う…。」
「兄さんは怪盗していた時…こんな目に遭ったらどうしていたの？」
「そりゃ捕まれば終わりだからな、逃げはしていたが目的はちゃんと果たしていたっつーの。ま、言っても俺がジゼルだったのはたったの二年だけだからなー…」

先代ジゼルである海斗は二年間、ジゼルの衣装に身を包み春斗と同じように美術品や悪魔に憑依された人間の元に現れては祓い、生活をしていた。
春斗達が住む屋敷は祖父の代から続く怪盗業のお陰でもあったが、それも盗んだ美術品の処分に困ってのこと。彼らの本来の目的はこの世に蔓延る目に触れられぬ存在との対峙にあった。
ものすごい労力を払って行うこの慈善事業も、訳があるのだが、春斗はそれを知らずにいる。
尤も、後に知ることにはなるのだったが…。

翌日。
学校が休みともあり、星ヶ岳美術館を訪れた春斗は、その人の多さに驚き、館内を見渡す。
すっかりジゼルが仕留めそこねた海の女のベースは行列が出来、その絵を一目見ようと外にまで人が溢れていた。チケットを購入し、まざまざと昨日の仕事の失態を見せ付けられたようで、春斗は一人、いたたまれない気持ちで群集を眺める。

「あれ、春斗じゃん！」
「げっ…慧…」

春斗が振り返るとそこには、両手一杯にジゼルのグッズを抱えた慧が立っていた。
美術館で販売されたジゼルのグッズなのだろうが、春斗はそれを見て改めて嫌な顔をする。当人の慧といえばにやにやとだらしない表情をして、春斗の肩を叩いた。

「何だよ、やっぱりお前ジゼルのファンなんだろー隠すなよー！今丁度海の女を見に行こうと思ってたんだ、一緒に行こうぜ」
「あ、ちょっと…！」
「ほら、早くしないと閉館しちゃうぞ、なんたって今あの絵を数秒見るだけで一時間は並ばないといけないからな！」
「…まるでアトラクション待ちみたいだね…」

慧はそのまま強引に春斗を海の女を見るための列に引き込む。
この美術館に訪れている殆どの人間が昨夜のジゼルが盗もうとした絵を見たがっている。
そんな大それた事をした少年が今まさにすぐ側にいるというのに誰もそれに気づくことはない。春斗は奇妙な気持ちになりながら、絵のあるホールを眺めた。

（修也さん…大丈夫かな…）

ふと米粒のように人が並ぶ列の脇に、一人絵を見つめるわけでも、並ぼうとしているわけでもない少女を見つけ、春斗は目を奪われる。
彼女の顔には見覚えがあったが、名前が出てこない。
前に悪魔を祓った人間だっただろうか、はたまた美術品を盗んだ屋敷の娘か。
考えを巡らせていると、急に彼女の名前を思い出した春斗は、慧に振り返って告げた。

「ごめん、やっぱり僕時間が惜しいから今度来るよ…慧は楽しんでいって、あ、これパンフレットもあげる」
「お、おい、折角並んだのに何処行くんだよ、春斗！？」
列の脇に設置されていたロープを潜り抜け、春斗は慧に振り返ることなく走り去った。
慧はまたしても置いてきぼりを食らい、自分も貰った美術館のパンフレットに視線を落として小さくため息をついた。

「あのっ！」

人ごみから先ほどの少女を見つけ出した春斗は、努めて大きな声で少女を呼んだ。
一瞬、自分の事とは分からなかった少女がきょとんとして立ち止まった為、春斗は少女の目の前まで回りこみ、少女がちゃんと名前の子と合っているのを確認して笑顔を向けた。
「あなた、天野栞（あまのしおり）さんですね？」
「…どうして、私の名前を？」
「僕の名前は吾妻春斗…お兄さんのその…知人で…あの絵のことについて尋ねたいんです、何故、未完成なのかを…」
「兄のお知り合いの方…そうですか…初めまして、あの絵が未完成であることを知っていたのは貴方が初めてです、私もお話を伺ってもよろしいですか？」
春斗は栞が不審がっていないことに安堵して、二度ほど頷いて踵を返した。

「じゃあここではなんですし、下のレストランでお話しましょう」
「はい」
栞の表情は浮かなかったが、静かに頷きそう返した為、春斗も歩き出す。
彼女は天野修也のたった一人の妹、天野栞。
何となく写真を目にしていて顔と名前を覚えていたのは奇跡ともいえた。春斗は後ろからついてくる彼女に不審がられないようにいかに情報を引き出すべきか考えながら、携帯を取り出し、海斗にメールを送る。

〔天野栞さんに接触することが出来たから、修也さんの出来るだけプライベートなことを教えて〕

返信はすぐで簡潔だった。

〔わかった、今添付したデータを開いて目を通しておけ〕

四話

美術館地下のレストランは、あの美術館の盛況振りが嘘のように、人の姿がまばらだった。空いた席に腰掛け、栞と向かい合った春斗はまず、何を言ったらいいか考えた。
俯いた彼女は言いたいことがありそうだが、さすがについ先ほど顔を合わせたほど初対面の相手に何を話したらいいのか、彼女もきっと迷っているのだろう。
ここは場を和ませようと、春斗はにっこりと笑顔で栞に話しかけた。

「それにしても、修也さんの絵は優しくていい絵ですよね。実は星ヶ岳美術館で海の女を見るのは二度目で…今回はジゼルの騒ぎがあったからまた見たくなって見に来たんです」
「兄の絵を…そんな風に言って下さるなんて…嬉しいです。兄の生前にはあまり誰からも評価を頂かなかったので…」
「そうですか…残念です…僕はとても気に入っているのに」

案外嘘でもない一言を呟き、適当にメニューをめくる。
栞は今の会話で若干緊張が解けたのか、彼女も笑顔を返して話を続けた。

「そういえば…あの作品が何故未完成か…でしたね…未完成であることは兄から？」
「ええ…」
「実はあの絵は、二枚で一つの作品…なんです」
「二枚で？」

春斗は栞に気づかれないよう、携帯にメモを取りながら顔を上げる。

「あの絵、でかいでしょう。この美術館には展示スペースが少ないからって断られたんです。元々兄の絵をここの館長さんが気に入って下さって…それで置いて頂けることにはなったのですが…」
「絵の大きさから二つは飾れないと…」
「私…悔しくて…」

制服姿の栞は、自分の制服のスカートをきゅっ、と握り締めながら目に涙をためた。
春斗はおろおろと栞が泣きそうになっているのを慰められず、困っていると、栞はふふっ、と小さく笑んで涙を拭った。

「ごめんなさい…その…館長さんから昨日、電話が来たんです」
「えっ？どんな？」
「ジゼルのお陰で海の女を見に来る人が増えたから、もう一枚を絵を買い取らせて欲しいって…」
「な、なんて自分勝手な…」
「それで…私も断ってしまって…兄になんて謝ればいいか…私…」

ついに顔を覆って泣き出してしまった栞に、春斗は鞄からハンカチを取り出して栞に差し出す。
栞は差し出されたハンカチにきょとん、としていたが、やがて静かに受け取り、涙をふいてありがとうと述べた。彼女が断った以上、修也の悲願を叶えることは出来そうにない。
だが春斗には一つ、秘策が思いついていた。

「謝ればいいんです」
「えっ？」
「お願いがあるのですが、一つ、引き受けてはもらえませんか？」

夜。
すっかり来場客も消えた美術館で、春斗は厳重な警備を眺める。
リベンジともあり、海斗も隣に居たが、その格好は普段ジゼルが着用しているものと似た衣装で、表情は暗い。

「はあ、久々にこんな格好にさせられると思わなかったぜ…今度は失敗すんなよ…」
「わかってるよ、父様に叱られちゃうものね」

バサッ、と体をマントに包み込むと、数秒で剥ぎ取り、マントに包まれていた体は包む前とは打って変わり、丸みを帯びる。他校の制服に、セミロングの黒髪、愛らしい表情の少女、栞に変身した春斗はにっこりと笑って海斗にピースしてみせる。

「どう？完璧？」
「おう…お前変装術だけは得意だよな…ともかく、俺がおとりになっていられんのも数十分、すぐに蹴りをつけろよ！」

くん、と自分の身長の二倍はあろう鉄格子を飛び越え、海斗は美術館の方向へと走り出した。
栞の姿となった春斗もそれに続き、鉄格子を飛び越える。
丁度春斗の足が地面に着いた瞬間、鋭い警官の声と犬の鳴き声が響き渡った。

「いたぞ！ジゼルがやっぱり現れた！今日はなんだかちっこいぞ！」
「うるさい！黙って追ってこいのろま共！」

（大丈夫…かなぁ…）

追ってくる警官の一言に激昂して反論しながら逃げる海斗を思い、春斗は心配になりながらも美術館の壁を登るべく、歩き出した。

窓を割ると警報が鳴る為、ゆっくりと窓の桟に指先を引っ掛け、起用に押し開けた春斗は、警備が薄いことを確認して海の女のベースへと歩いてゆく。
既に海斗がここから誘導したのか、警備はされておらず、あっさりとホールに侵入した春斗は絵の付近まで歩み寄った。

『誰…か…いる…のか…？』

声がすぐにした。
その声は澱んでいて、修也のものだとは気づいたが、様子がおかしい。
しゃがみ込んで薄いその体を覗き込むと、修也は苦しげに顔を上げ、口を動かした。

『しお…り…？しおり…なん…でっ…！』
「天野さん、しっかりしてください！」

春斗が触れようとした瞬間、修也からどす黒い煙が一斉に噴出し、修也は悲鳴を上げる。

春斗は煙が口に入り込まないように口を押さえ、悪魔と変貌してしまった修也に、苦い表情をした。既に、己の自我を失くしたようにぐったりとした異形の姿。
体は犬のようであり、蛇のようにうろこがある。長い尾を力強く振り上げ、地面を叩きつければ、地震が起きたかのような大きな揺れが美術館を包み、外も中も全ての照明が一度に消えうせた。

「天野…さん…」

牙のびっしりと生えた口を大きく開き、咆哮をする姿はもはや人間だった事すら忘れてしまうようで、春斗はつい、目を逸らして俯いた。遅かった、自分が昨日助けられなかったから。様々な気持ちが溢れ出し、春斗はやるせなさから立ち尽くし、そんな春斗の巨大な爪が振り下ろされようとしていた。

五話

振り下ろされた爪は、見事に春斗の腹を抉るように命中し、血が出るような傷がかろうじて出来なかったものの、そのまま軽い体は吹っ飛ばされて壁に激突する。
腹部に強いダメージを受けた為か、春斗は大きく体をしならせて吐血し、その場にうずくまって動けなくなってしまう。
その衝撃でカンカン、と春斗の体から何かが飛び出したが、このホールにいる悪魔がそんな事を構うはずがなく、春斗は霞む視界で修也だった悪魔を見上げた。

「あまの…さんっ…！」

『お前のお陰がなければ、見に来るものが一人だっていやしないこんな絵の完成を待ち続けた俺を、笑いに来たのか…』

修也の声に混じり、低く野太い声が混じっている。ぎりぎり修也の自我が残されているのか、ジゼルだと気づいた修也が春斗にそう尋ねる。
頭の中に直接響くような不快な音声に顔をしかめていると、体を指先で持ち上げられ、春斗は息を詰まらせて小さく呻いた。

『答えろよ、怪盗ジゼル…なんの為に…なんの為に俺の絵なんかを…！』

パン！と再び振り下ろした尾の先が、先ほど春斗が落としたものに軽くぶつかり、カチッ、と小さな音の後、突然修也が聞きなれた優しい声が、ホールに響いた。

「お兄ちゃん、あのね、私。栞…だよ」
『し…栞…？本物…の？』
「実はお兄ちゃんの絵の片方を、展示しないで下さいって言ったの、私なの、怒ってる？けど、許して欲しいな、私ね、お兄ちゃんの絵が、一番好きなの、だからいいでしょ」
指先から春斗の体がこぼれ落ち、春斗の変身はふっ、と解けて倒れこむ。
声を聴いてから、先ほどまでの邪悪な煙が徐々に薄くなり始め、最後の一言には春斗の変身のように体は修也のものへと変わっていた。
「私があの絵の片方を、独り占めしても…ごめんね、お兄ちゃん、天国でも、幸せにね」
『しおり…っ…』
ぼろっ、と幽霊であるはずの修也の瞳から涙のような淡い光が漏れ、伝ってゆく。
春斗は上半身をゆっくり起こすと、緩く微笑んで彼の絵を見上げた。
「居たんじゃないですか…唯一、心から貴方の絵を愛する人が…」
修也の心の中に、ふわりふわりと過去の思い出が甦る。
何気なく、栞と過ごした、家族と過ごした日々、そして楽しんで絵を描いていた日々。
人が、走馬灯と呼ぶものが遅ればせながら流れてゆき、修也は静かに目を閉じた。
『ジゼル…』
「はい」

『昨日は悪かった…それともちろん…今日のことも…もう未練もなくなったよ、ただ…一つだけお願いしていいか？』
「ええ、構いません、何ですか？」
『　　』

用件を言い終わると、
修也は清清しい笑顔で光の粒となって消えてしまった。
今回は自ら祓うことなく、修也が成仏した事で、ほっと安堵を一つ、春斗は困ったように微笑んで、横になったまま、彼の巨大な絵を再び見上げた。

「さて…もう仕事頑張ろう…！」

「待て！ジゼル！」
「ったくうじゃうじゃうじゃうじゃ、うぜえっ！いっそ纏めて爆発させてやろうか！」
「兄さん！」

警官から数十分、春斗と修也の出来事も知らず、追いかけっこをしていた海斗は、不意に声を掛けられて正面を見遣る。そこには満身創痍のジゼルの姿をした春斗と、開け放たれた窓からぶら下がったロープ。
そして何より目を惹いたのは、春斗の体より大きな美術品。
海斗は言いたいことを全て飲み込み、春斗の手を掴むと、追いかけ

てきた警官二人に同時に振り返り口角を上げて言い放つ。

「それでは、ごきげんよう」

窓から足を離し、ロープの先にあるヘリに揺られて、二人は美術館を飛び立った。

美しい月夜の夜、再び姿を消した二人のジゼルに圧倒されながら、短い夜はあっという間に更けてゆくのだった。

翌日、ジゼルに盗まれた絵画のニュースを眺め、栞は残念そうにテレビの電源を落とす。

学校へ行く為、食べかけのパンを口に押し込み、クツも同じようにかかとを押し込む。

まだ薄暗い朝、ドアを開けると何故だか数センチしか開かない。

開いた数センチから何が挟まっているのか確認した栞は、あっ、と声に出して驚き、ドアを強引に開いて立てかけられていたものをみて立ち尽くす。

そこには昨晩盗まれた絵画、海の女が綺麗に衝撃吸収剤に包まれて置かれていたのだ。

栞は暫く驚いたまま、一人の少年を思い出していた。

「…まさか…ね…お母さん、お母さん、大変だよ、お兄ちゃんの絵が！」

『この絵を愛する人だけに見せていたいんだ、お願いしてもいいだろうか』

第二章　偏屈男の壷

「あ、あーーーー」

蜜色に輝く柔らかな色、その上に絶妙にかけられたカラメルソース。春斗の大好物である有名な菓子店のプリンを、わざわざ病室で見せびらかすように食べていた海斗は、にやりと笑って噛んだスプーンを動かした。

海の女を盗む際、派手に怪我を負ってしまった春斗は、全治数ヶ月、アバラが数本折れていて起き上がるのもやっとの状態だった。見舞いカゴ一杯に入ったプリンが一つ、また一つと無くなってゆくのを涙目で見つめながら春斗は海斗を睨みつけた。海斗はそんな春斗の視線など屁でもないように空のプリンのカップをくずかごに投げ入れた。

「親父が頑張ったお前にってさ、まあアバラが折れていて体も起こせないんだ、食えないんじゃあ腐らせても親父に悪いよな？」
「食べさせてくれたっていいじゃん！」
「誰がそんな寒いことするかよアホ、全部食うぞ」
「や、やめてよぉー！」

はあ、とため息をつき、噛んでいたスプーンを口から離した海斗は、ぐいっと春斗の病院着を引っつかみ引き寄せる。アバラが折れているというのに強引な海斗の行動に驚き、痛がっていると、海斗は低い声で告げる。

「これでわかっただろ、悪魔ってのは自在に姿を想像したままに出

来るんだ。俺や、お前のように」
「で、でも僕たちは悪魔じゃな…」
「そうだけど、本質は、一緒なんだ」

パッ、と春斗の服から手を離し、椅子に深く座り込む。
春斗の家系は代々、ジゼルの姿をしている時だけ、特殊な力を使うことが出来た。
それは春斗が栞に変身してみせたように、自分の想像が、力となる。
力を使っている時は額にトランプのダイヤのようなマークが現れる為、ジゼルは額の出るような髪形をしているし、現在は隠れるように長い前髪を無意識にしている。
そしてその力を使って、悪を征しているのだ。

「今度お前が下手をすれば死ぬし、お前がこの力に誤れば誰かが死ぬ。わかったらしっかり仕事しろよ、次お前がもしジゼルじゃなくなったら、…」
「わかってる…雪那(せつな)にはこんなこと…させられないもんね…」

ガラッ、と病室の扉が開き、看護婦が現れ、回診の時間となった。
海斗は椅子から立ち上がると、適当にカゴを冷蔵庫に投げ入れ、春斗に背を向けたまま続ける。

「でもまあ、無茶はすんなよ」
「…うん」

看護婦に礼を述べながら、去り行く海斗に、嬉しそうに目を細めていた春斗だったが、海斗に振り返った看護婦がニコニコしながら尋ねた一言に、つい声を出して笑ってしまう。

「彼、弟さん？しっかりしてるわね～」

慣れた一言だったが、今は尚更、可笑しく聞こえるのだった。

「春斗ー！無事か？」

翌日、通常の面会もできるようになった春斗は、真っ先に訪れてきた慧を歓迎した。
何だかんだとはいっても、幼い頃からの友達だからか、慧も春斗の趣向などを理解している。その手には見覚えのあるプリンのカゴが握られていた。

「ほら、お前の好きなパワフルプリンくん、十個セット！」
「あ、…ありがとう慧…」

やはり彼は友人ではなく腐れ縁だ、握られていたプリンを見てそう思ったものの、春斗は少し、嬉しそうに椅子を勧めた。

「座ったら、こんな遠い病院まで悪いなぁ…」
「いいっていいって、最近ジゼルの予告もないから暇だしさ！」
「あ…えっと、うん…」

まさかジゼルが目の前で入院してるとも知らないだろうから言うのだが、そんな一言には実はバレているのでは？と時々肝を冷やされる。冷蔵庫にプリンを入れようとする慧を引き止めると、ぱっと慧

のポケットから手帳が落ち、バサッ、と春斗の視界に新聞の切り抜きが舞い上がった。

「これ…ジゼルの？」

「そう、全部とってあるんだ、ファンだからな」

「そっか……ん…？」

舞い散った新聞切り抜きの一枚がふと春斗の視界に入る。ほとんどジゼルの記事に押されていたが、春斗の目に入ったのはその記事ではなく、その下に小さく載った男の写真だった。

「ねえ、この人誰？何だか見たことがあるんだけど…」

「ん？ああ、この人この近所に住んでる骨董マニアだよ、名前は大隈達也（おくまたつや）。変なオジサンでさ、性格悪いことで有名なんだ。このオジサンがどうかしたのか？」

「いや、見たことあるから気になって…」

「よく道で人にわめき散らしてるからなー見たことあるのかもよ。この人。ジゼルに狙われない為に家を改装したんだぜ？」

恰幅のいい姿は見るからに金持ちそうではある。骨董マニアともなれば、目の敵にされているかもしれなかったが、それ以外に、この男を何処かで目にしている気がしてならなかった。

春斗はじっくりとその記事を眺めていたが、慧に記事を返し、海斗に尋ねてみることにしてそのことは一度、頭の隅に追いやる。

彼の骨董品が次のターゲットになったのはそれから間もなくの事だった。

二話

「ここか…」

完治してから数週間後、学校にも復帰していた春斗は放課後、学校からそれほど遠くない一件の民家に訪れていた。
それは民家、と呼ぶには少し贅沢な造りで、どちらかといえば屋敷に近い。
春斗達が住む豪邸に比べればなんてことのない屋敷ではあったが、少し庶民と感覚が似ている春斗は、そんな小さな屋敷を見上げ、感嘆の声を上げる。

少し高い位置にあるインターフォンに指を伸ばし、家主が反応してくれるのを待った。
しかし数分待った所で音沙汰がない。もう一度ゆっくりボタンを押してみるがやはり反応はなく、春斗は息を吸い込んで大声で叫んだ。

「すみませーん、どなたかいらっしゃいませんかー？」

しっかりと閉まった鉄格子。奥に見える洋館は公園があるような住宅街にはすこし異質で、春斗はもう一度インターフォンを押して、屋敷に向かい声を掛ける。

「すみませーーん、お留守ですかーーー？」
「磯城川高校の子？」

キッ、と春斗の背後で自転車が停止する音がして、春斗は振り返り、声を掛けてきた中年の女性を見つめた。女性は真面目そうな春斗の

容姿に安堵したのか、自転車を脇に止めて春斗に近寄った。

「何の用があるのか知らないけれど…あまり大隈さんのお家に近づかない方がいいわよ？最近ろくに姿を見せてないようだし…奥さんが死んでから益々家から出なくなってね…」

「奥さん、亡くなってらっしゃるんですか？」

「そう、丁度一年ぐらい前だったかしら…事故でね」

春斗はもう一度大隈の屋敷を見上げ、やはりターゲットはここで間違いないことを確信する。

霊はきっかり一年、成仏できずにこの世に留まると春斗達が呼ぶ所の悪魔となってしまう。この屋敷には骨董品が沢山ある上、一年前妻が死んでいるとなれば危ない状況かもしれない。

海斗からもこの屋敷から悪魔の痕跡を感じると伝えられており、今日は美術館と違って容易く入り込めない以上、美術品を確認するためにやってきたのだ。

女性は春斗に大隈とはなるべく関わらないように釘を刺し、再び自転車に跨ると走り去っていった。

あの女性の反応から見て、大隈が嫌われていたというのは事実なのだろう。

春斗は女性が完全にいなくなったことを確認し、美術品はわからないままだったが、予告状を格子の間から投げ入れ、その場を後にした。

「ねえ兄さん」

帰宅した春斗は、リビングのど真ん中にバスタブを置き、お湯に浸かる海斗を見つめて、声を掛ける。
贅沢にも大理石の床に泡やお湯を（それもリビングだというのに）溢れさせながら風呂を楽しんでいた海斗は、振り返った春斗に水鉄砲でお湯を浴びせ、不服そうな表情をした。

「んだよ、人が風呂入ってる時は自分の部屋にでも居ろよな…」
「兄さんがリビングなんかでお風呂してるからでしょ、お風呂はお風呂場で楽しんでよ！」
「でぇ、何だよ」
「大隈さんのことなのだけど…もしかして僕…会った事ある…かな？」

海斗はしばらく春斗の顔をじっと見つめていたが、やがて再び春斗の顔にお湯を浴びせるとすぐに背を向いた。

「知らね、まあ何にせよ予告状を投げ込んだ以上、警察に連絡するなりしてっだろ。美術品は見ればわかるしまあいいだろ、お前、余計なことするなよ」
「何だよ、余計なことって」
「…この前みたいに、アバラ折れた状態で絵を盗もうとするとかそういうことだよ！」

ふてくされた様にお湯をかけられた顔を拭い、春斗は再びテレビに視線を戻した。海斗はそんな春斗を一瞥し、春斗の小さな頃を思い出しながら首を振る。

（いや、まさか…春斗が小さい頃のこと覚えてるわけねぇよな…）

三話

犯行当日。
パンを片手に新聞を読んでいた海斗は、今晩、予告状が送られているにも関わらず平穏な記事が並ぶ新聞の一面にしかめっ面をしていた。
ただの民家に忍び込むときが初めてではない。
それでも予告が来れば警察には連絡するだろうし、連絡しなくても噂が滲むのは容易いこと。
すぐに記者に拾い上げられ、新聞には必ず掲載されてきた。

だが今回はジゼルの事どころか、大きな見出しが少なく、昨晩のサッカーの試合結果などが載っている程度で、どこをめくってもそれは同じ。
海斗は新聞を乱暴に畳むと、隣で紅茶をすすっていた春斗の胸倉を掴み、睨みつける。
突然掴みかかられた春斗は紅茶のカップを手放してしまい、カップは一度宙を舞って地面へと硬い音を響かせて割れてしまった。

「おいっ、どこにも予告したって記事がねーじゃねぇかよ！お前、適当に放り投げてきたんじゃないだろうな！」
「そそ、そんなことないよぉ！確かに家には入れなかったけど、玄関先だから絶対見るだろうってそこに…」
「大隈は出無精だって聞いたぞ！お前、大隈の家に少し忍び込んで確認してこい」
「ええっ！？」
とんっ！と掴んでいた春斗の制服を離し、海斗はパンを紅茶で押し

込むと席を立ち、春斗に鞄を投げつける。慌てて自分の鞄を受け取ることとなった春斗は、呆然として海斗を見つめた。

「に、兄さん！」

「ったく役に立たないヤツめ…俺は少しやることがあるから、さっさと飯食って一分以内に家から出て誰にも見られず忍び込めよ、いいな！」

「…はい…」

絨毯にシミを作る紅茶の残骸を見つめながら、春斗は大きくため息をつくのだった。

「すみません…お邪魔します…」

辺りを見渡し、誰も居ないことを確認した春斗は、まず通学鞄を柵の上から放り投げ、自分は一度大きく助走をつけて壁を蹴り上げるようにして高く飛び上がる。

とてもじゃないが人間が出来る動きではないが、春斗の受け継いだジゼルの家系では想像した通りに世界の理を歪めてしまえる力がある。春斗は海斗よりこの能力に長けている為、ジゼルの姿をしていなくてもこの力を使用することが出来た。

安易に柵を飛び越えられた春斗だったが、最初に投げ入れた鞄が足元に転がっているのを見つめて、一瞬血の気が引く。

柵には有刺鉄線だけではなく、電撃まで張り巡らされていたようで、通学前だというのに鞄が黒焦げになっている。

春斗は煙を吐く鞄を抱きしめ、不安に駆られながら歩き出した。

（ま…まるで監獄だ…）

玄関まではまだ距離がある。

横暴な兄を恨みながら、春とは恐る恐る玄関へと向かうのだった。

外壁が高い為か、外からは薄暗くしか見えなかった屋敷の全貌に、春斗は感嘆する。

庭はとても綺麗に整備されているし、壁にはシミ一つない、まるで新築のようだ。こまめにペンキを塗っていたことが伺える。洒落た洋館に合う洒落たテラスと庭。春斗は自分が何のためにここにやってきたのかを忘れて暫く庭に見惚れていたが、急に背後から声を掛けられ、肩を震わせた。

「坊主、ここで何してる」

「え…あ、あのっ…さがしものを…」

振り返るとそこには、新聞でも海斗から見せられた写真でも確認した、大隈の姿があった。

すっかり忍び込んでいたことを忘れて動揺していると、大隈はすっと一枚の封筒を春斗に差し出す。

それは数日前、春斗が投げ入れた予告状だった。

春斗は既に、心臓が止まるのではというほどの衝撃に言葉が出ず、ただ封筒と大隈の顔に視線をいったりきたりさせた。

「これだろ」

「あ…えっと…」

「どうやって俺の屋敷に入ったかは知らんが、こそ泥みたいな真似しよって…とっとと出て行け、馬鹿みたいな遊びにつき合わせるんじゃねぇ」

ぐいっ、と無理やり春斗に予告状をつき返した大隈はすぐ踵を返して歩き出してしまう。

春斗はなんとか呼び止めようとしたが言葉がまだ浮かばず、ただ、あのっ！と切り出して早々に後悔をした。

「何だ。今日のことは学校には言わないでいてやるからとっとと学校に行って二度と来るなよ」

「や…約束できません…っ」

「んだと？」

震える両足を押さえつけるように両手をつき、決心したように春斗は再び封筒を大隈に差し出した。

「これはあなた宛てです。僕はこれがちゃんと届いてるか確認しに来ました、今夜、また来ます。」

大隈は何も言わず。春斗に歩み寄ると封筒を受け取り、封を切る。中身を適当に読み流すと、それをそのまま紙ふぶきでも作るかのように細かく千切り、大隈は深く息を吸って大声で叫んだ。

「帰れ！」

春斗の長い髪がその大きな声で振動するほど、迫力あるその一言に怯みつつ、春斗は胸元から新しい予告状を取り出し、大隈に投げつける。

怪訝な表情の大隈を尻目に、春斗は大きく飛躍して柵を越える。そ

の間際、春斗は再び大隈に告げた。

「今夜八時、お伺いします、あなたの大切な人を救う為に」

素早く塀の向こうに姿を消した春斗に、再び渡された予告状を見つめ、大隈はその場に座り込む。

顎にたっぷりと生えた髭を数度撫でながら、大隈は小さく呟いた。

「今更誰を救うって言うんだ…クソッタレ…」

四話

「終わった…僕の人生…何もかも…」

机に突っ伏し、まるでこの世の終わりのような顔をぶらさげる友人に、慧は苦い顔をして春斗の背を叩く。登校してきてからずっとこの調子で、慧は恋か何かかと勘違いをして隣に座り慰める。

「そうだよなぁ、辛かったな…春斗…」

「慧は何も知らないでしょ…」

「大丈夫だぞ、春斗！この世にはもっと沢山カワイ子ちゃんがいるんだしな、例えばジゼル…とか！」

「あーうんうんそうだねそうだね、因みに僕は失恋なんかしてないからね…もうほっといて…」

そのジゼルであることを一般人に公表してしまったのだ。彼は性格が悪いと評判だったらしいし、いつ何時バラされてしまうか分からない。もしジゼルの正体がバレたとなれば、屋敷には取材が押し寄せるだろうし、一家もろとも投獄、そしてジゼルはこの世から姿を消してしまう。

家族が代々続けてきた伝統を自分の代でひねり潰してしまうというのは、なんとも責任が重く、こちらがひねり潰されてしまいかねん勢いだ。

春斗はこれまでの人生を振り返りながらひたすら祈る。

どうかまだ兄にはバレていませんようにと。

「あれっ、春斗、お前のケータイ鳴ってるぞ」

春斗はゆっくりロボットのように振り返り、携帯のディスプレイを見つめて神をさっそく恨んだ。
ディスプレイにはいっそ清清しく、吾妻海斗、と記載されていた。

『もしもし、春斗か』
「あ…うん、兄さん…どうしたの？」
『あ、いや、別に用はねぇんだけどよ…お前さ、大隈と会ってなんか思い出したか？』
「えっ…？お咎めなし？」
『あ？咎め？何の？』
「いや…知らないなら…いいのだけど…」
『何か思い出したのかって聞いてるんだよ』
「特には…」
『そうか、じゃあいいわ、さっさと仕事終わらせてこいよ、ったく面倒くせぇなお前に電話するのもよ』

ブツン、といつもながら一方的に通話が遮断され、春斗は腑に落ちない気持ちで携帯をしまう。
海斗は春斗が大隈と接触してきたことを会って思い出したか？という質問で知っているのを暗に示している。
だとすれば盗聴していたか、どこかで見ていたかはしていたのだろうが、自分の正体をバラしたも当然のあの態度に関して何も言ってこないことも気になったし、海斗の質問自体何だったのか気掛かりだった。
春斗は不気味に思いながらもそれ以上考えるのをやめ、どうやら最

悪の事態にはならなくて済みそうなことに取り敢えず安堵するのだった。

「春斗？兄ちゃんだったのか？」

「うんそうみたい、はぁーよかった、僕切腹しなくて済みそう」

「…お前の兄ちゃん何者なんだよ…ほんとに…」

「春斗(あに)兄様…」

携帯を見つめていた海斗は、背後からぼそりと聞こえてきた一言に驚き、振り返る。

三つ編みがよく映える美しい黒髪をした文学少女、といった出で立ちの肌の白い少女が一人、海斗の後ろにただ立っていた。

その制服は磯城川中学制服で、薄い灰色をベースとしたセーラーにピンクのタイが結ばれた上品な制服。唇を動かしただけで華やかなその美少女に、海斗は苦い表情で頷いた。

「そう、あの馬鹿自分がジゼルだなんて公言するような真似しやがって…まあ大隈の事なら大丈夫だろ…」

「兄様が危惧していらしているのは恐らく、私のことですね？」

海斗は返事しなかった。

肯定する気にもなれない。いや、したくなかったのだ。
海斗はそっと少女近づき、頭を甘えるように胸元に預ける。まるで姉と弟のようだが、兄と妹。
乱れのない三つ編みの房を手に取り、海斗は静かな口調で告げた。

「なあ、今日は屋敷に居てくれ…春斗も喜ぶ」
「はい、わかりました。もとより、私は兄様たちが為…」
「そんなことを言うな…って言ってもお前には意味がないか…雪那(せつな)…」

曇りの無い湖畔のような美しい青色の瞳が数度まばたきをして細まり、海斗の姿を捉える。
その表情は喜怒哀楽どれも当てはまらない虚無が広がっていた。

五話

夜、八時。
住宅街は明かりだけを残し、道には数度車が行き来する程度で人影は殆どなかった。
その中でも一番目を惹くような大きな屋敷、大隈邸といえば、こんな夜に明かりの一つも灯っておらず、警察どころか猫一匹の気配すら感じられない。

ジゼルは本日二度目となる静かな屋敷を見上げて困った表情をする。横に立っていた海斗がじとりとジゼルを見つめた。

「おいおい、静かにもほどがあるぞ…これじゃあ美術品に潜って眠ってる可能性があるぞ…」
「まあ…今回は民家なんだし…盗めばいいんじゃないかな？家で祓った方が何かと楽だし」
「それでもいいけどしくじるなよ…お前はいつまで経っても半人前だからなあ…」

小さな柵でも飛び越えるように今回も身軽に柵を飛び越えたジゼルは、門から海斗に振り返る。今回は警備も薄い為、逃げる際に見られないよう、海斗は見張りを担当する。
まるで空き巣そのもののようで、ジゼルはいたたまれない気持ちで海斗に声を掛けた。

「その…何かあったら連絡するから…」
「あってからじゃ遅いだろーがアホ。何もないように済ませてこい」
「はい…」

電撃に遭わないよう出来るだけ高く飛んだが、足元が何やらぐらつく。もたつくジゼルに海斗は鋭く振り返って告げた。

「あ、そういやぁ大隈は自分の美術品が盗まれないように家を改造してるから罠には気をつけろよ！」

と海斗が全て言い切る前に何か罠が発動したらしく、落下してゆきながらジゼルの声が遠く響いた。

「兄さんこそ遅いよーー！」

腰から盛大に墜落したジゼルは、床が針山でないことをに感謝し、辺りを見渡す。どうやらここはただの落とし穴ではないようで、ちゃんと落ちた人物が死なないようにクッション、そして出口が設けられている。性格が悪い、と言われていたにしては、迷い込んだ子供などの目線に合わせた丁寧ぶりである。

しかしこの出口にしたがって行けば恐らく、塀の外にたどり着く為、ジゼルは壁にゆっくりと足の裏をつけ、垂直になるように歩き出す。これもジゼルの想像が生み出す超常現象、壁を駆けてゆくなどまるでアクション映画さながらだ。

無事落とし穴から身軽に飛び出し、玄関はとんとん、と慎重に進ん

でゆく。
トラップが発動する前に玄関口に漸くたどり着いたジゼルはなんとなく、ドアを引いてみた。
開くはずもないと思っていたがドアは予想に反してすぐに開き、薄暗い空間が視界に広がる。

「気をつけろよ」

背後の柵、向こう側に居る海斗にそう促され、ジゼルは一度頷き、再び背を向けて歩き出した。

ドアはジゼルだけを受け入れたかのようにすぐに閉まり、重くドアが閉ざされる音を聞きながら、海斗は不安そうに屋敷を見上げるのだった。

入ってすぐ、目が慣れず動けずにいたが、やがて視界がしっかりしてくると、まず目に入ったのは大きな肖像画だった。
一人の人物が描かれているようだが流石に暗くて見えず、ジゼルは辺りを見渡しランプを見つけて灯っている姿を想像し、明かりを生み出す。
かざせば何とかその一枚の肖像画は見ることが出来、その美しさに思わず息を飲んだ。

描かれていたのは女性だった。憂いを帯びた優しげな表情に、幼くも美しい顔立ち。見た目の年齢は大体２５〜２８といった所だろうか。ジゼルは彼女がここの妻であることをすぐに悟り、ランプを一度置いた。
この屋敷はまるで、時が止まっているかのように全てが現代から置

き去りにされたように古いものばかりなのにも関わらず、新品のように美しい。
罠があるとわかっていてもジゼルはそのまま肖像画に近づいて妻の姿を目に留めた。
今回はこの妻が一年前に死んでいる為、悪魔となる可能性が高い。悪魔となってはもう姿が分からなくなってしまう。せめてその前にこの姿を記憶に残しておきたい。何故だかそう思えた。

「坊主」

背後からした声に、ジゼルはゆっくりと振り返った。そこに居たのはやはり、大隈だった。

「勝手に屋敷にまで上がりこんできやがって…え？もう警察呼ぶぞ、クソガキ」
「ご自由になさってください、僕は警察と仲良しなのでもうそんなことで怯んだりしません。ですがどうか教えて頂けませんか、あなたは知っているのではありませんか？奥さんの居場所を」
「馬鹿言うんじゃねぇよ、アイツは俺が骨を拾ってやったんだ、ここにいてもらっちゃあ困るんだよ！」

くっ、と大隈が何かスイッチのようなものを押し、ジゼルの体がぐらつく。足元が再びぱっくりと開き、ジゼルは重力に従って落ちてゆくはずだった。だが、

「同じ罠は僕には通用しません、諦めて奥さんの場所を教えて下さい！」
「な、なんだお前は…化け物か…」

落とし穴が開く前となんら変わらないように、浮いている、とも言

えずただ立っているジゼルに一瞬驚いた様子の大隈も、ならばと反対の手のボタンを押す。
すると今度はエントランスの階段の両脇のドアが開き、突然大量の水が流れ込む。

「えっ…」

全く予期していなかったこの攻撃にあっさり飲み込まれてしまったジゼルは、高い位置で見つめる大隈を見上げ、ある事に気がついた。だが気がついたときにはもう遅く、水に深く押し流されたジゼルはそのまま玄関まで流れ着き、ジゼルが完全に外に出るとバタン！とドアが乱暴に閉じられた。

「大隈さん…中々手ごわいですね…」

ずぶ濡れになった衣装をぎゅっと絞りながら、ジゼルが呟くと、流されていたところから見ていた海斗が指をさしてその様を笑う。

「お前だっせぇな！」
「う、うるさいよ兄さん！ご近所さんに気づかれるでしょ！」

ジゼルは一度目を閉じ、意識を集中させると、体を濡れたマントで包み込む。
すると濡れていた体はあっという間に姿を変え、一人の女性の姿が浮かび上がる。マントを脱ぎ去った女性の姿は大隈の妻の姿であった。

六話

大隈は一人、真っ暗な自室で壷を眺めていた。所々ヒビが伝い、とても高価な美術品とは思えないその壷を愛おしむように撫で、部屋を見渡す。棚に飾られた骨董品はきちんと何の変化もなくその場に鎮座していたが、やはり、その心は晴れぬままであった。
ふと、ドアが開く音に反応して、大隈は振り返った。
ようやくジゼルが罠の数々を潜り抜けてやってきたかと思えば、振り返るとそこにいたのは、懐かしい妻の姿だった。

「…洋子…」

ただ黙って立っている妻、洋子は、ゆっくりと口を開いた。音はない。開かれた口はそのままやんわりと弧を描いて美しい笑みへと変え、大隈は急いで洋子に近づくと、その存在が確かなように強く、抱きしめた。

「会いたかった…とても…、一年前から俺はお前に…」
「…大隈さん」

ハッとして一度腕を離し、顔を確かめる。その顔は見忘れることがない妻のものであるにも関わらず、声は先ほどの少年、ジゼル。混乱した大隈は洋子？ともう一度顔を覗き込んだが、その瞬間ふっと洋子の姿はジゼルのものと変わり、大隈は大げさに驚いて尻餅をつく。
ジゼルは大隈が触っていた壷を手に取り、深く頭を下げた。
「すみません、騙すような真似をして。僕は一つ、勘違いをしてい

ました」
「勘違い…？」
「僕は今夜、この世に未練があり、現世に留まっているあなたの奥さんを成仏させるため、こうしてやってきました。ですが、あなたが僕を水で押し出した時、気づいたんです」
すっ、とジゼルが大隈に手を伸ばす。大隈は少し後退したが、ジゼルの手のひらは大隈の体を裂くように軽くすり抜け、ジゼルは確信を得た。
「あなたが、現世に留まっている霊であると」
大隈は大きく目を見開き、言葉を失った。
自分が死んでいたことは、とうに気づいていた。だがこうして改めて言われ、気づかれれば、なんとも言えない虚無感が胸を締め付けるようで、大隈は膝をついて立ち上がりながら乾いた笑みを浮かべた。
『はは…別に隠してたわけじゃねぇよ。警察に言うなんて脅したが、俺の声はもうこの屋敷から一歩出れば皆無、死んでるってことをまざまざと感じるよなぁ…』
「どうしてこの屋敷に留まっているのですか？奥さんが亡くなっているとなれば、あなたにもう現世に留まっている意味など、ないでしょう？」
『だからだよ、俺ぁ、アイツに会わせる顔がねぇんだ…アイツが死ぬ前、俺はアイツと些細な事で喧嘩してな…』
大隈はジゼルが持っていった壷を一瞥し、目を伏せる。
丁度一年前、自分が死ぬほんの数日の事を大隈は追憶し始める。
その日はとても暑い、夏の日だった…―。

「洋子！洋子！」

古い洋館に、男、達也のだみ声が響いた。
明らかに怒気を含んだその大きな声に反応し、テラスに居た洋子は何事かと顔を出す。
大隈家には子供がおらず、長年夫婦で過ごしてきたが、こうやって達也が怒っているのは稀ではない。また何か癇癪を起こしたのだろうと洋子が出て行くと、そこには壷の破片を抱えた達也の姿があった。

「洋子！これぁ、一体どういう事だ、え？」
「どうなさったんです？」
「どうもこうもねぇだろ、これを見ろ、これは先日買ったばかりの壷だ！こんな粉々にしちまって謝罪の一つもねぇたぁ、どういうことだ！」
「えっ？壷…？」

風呂敷に包まれていた大量の破片を見つめ、おどおどとする洋子に、達也はついに怒りの頂点に達し、洋子の髪を引っつかむともう一度尋ねた。

「これはお前がやったんだろう！違うか！」
「ち、違います！私は今日、アナタのお部屋に入ってないわ！」
「嘘をつくな！だったら誰がこれを壊すってんだ！この屋敷には俺とお前しか居ないんだぞ！」

「……そう…ですね…」

ぽろっ、と洋子が涙を流し、達也はつい驚いて手を離した。泣かせるつもりまではなかったのだが、まだ怒りもおさまらず、泣いた洋子をそのままに、達也はその場を後にした。
ただ洋子が素直に謝ってくれればそれでよかったというのに、ああして反抗されたようで何やら無性に腹が立ったのだ。
自室のドアを乱暴に閉め、残った美術品が無事であるかどうかを確かめようとした所、ドアの近くに一匹の汚い猫がうろついている。

「猫…？」

達也は見慣れぬ野良猫に首を傾げ、よくよく辺りを見渡す。すると窓が数センチ開いており、そこから身をよじって入ってきていたのだ。達也はすぐに、洋子に怒鳴ったことを後悔した。
窓の側には机があり、そこに壷を置いていたのだ。
急いで部屋を猫を抱えて出ると、先ほどのリビングに洋子の姿がない。

名前を呼び、探し回っても何処にもいない。
ふと彼女の部屋に差し掛かると、洋服ダンスがまるで空き巣にでも遭ったかのように散乱している。達也は呆然として猫をつい放してしまい、洋子の部屋を眺める。
小さな飾りテーブルには、綺麗に復元された壷が一つ乗っている。
達也は壷を一瞥して、洋子のタンスを片付けながら、彼女が着物や高価なアクセサリーを質に入れに行った事を悟る。
自分はどうしてこうも愚かなのだろうかと、一時の感情に身を任せて妻を叱ったことを恥じ、洋子が帰ってくるのをひたすら待った。

しかし、洋子は帰宅することはなかった。
質屋から帰る途中、引ったくりに遭い、そのまま数十メートルバイクで引っ張られて亡くなってしまった。

達也は生まれて久方の涙を流し、自分の行動全てを悔いた。あの時しっかり壷以外を見ていれば、叱らなければ、早く猫の存在に気づけていたならば…。色々な思考が絡み合い、歪な形をした壷には涙が落ち、溜まってゆく。
達也は何度も妻の墓前に謝罪を述べながら頭を下げ、その場から動くことも出来ず、数日ろくに何も口にせず、気づけば自分も同じように死を迎えていたのだ。

それから一年間。
達也は屋敷がどれだけ煙たがられようが、綺麗にしていようと努力し続けた。
洋子が再び帰り、ただいまと告げにやってくるその日まで、そう、ジゼルが現れる今日まで続けてきたのだ。

七話

『俺はどうしたらいい？きっと洋子は俺を恨んで死んだはずだ！俺はなんて…なんて顔をしてアイツに謝れば…！』

「大隈さん、よく聞いてください」

ジゼルは大隈の話を聞き、マントを再び羽織った。

再び洋子の姿になったジゼルはにっこりと微笑む。変装だと分かっていても、大隈はじくりと心が痛んだ。

「あなたの奥さんは現世に存在しません。僕の兄は霊を感知する能力をもっていますが、この屋敷で感知されたのは一人だけ、つまりあなただけなんです。あなたの奥さんは現世に未練をお持ちではありません。」

『ど…どうしてそんなことが分かるんだ！大体、死んだ場所にうろついてる可能性も…』

「通常、霊は一番未練がある場所、そして物に癒着してしているはずなんです、だからそれはあり得ません」

『そんな…馬鹿なだって…洋子は俺のせいで…』

「僕ならきっと…そんなことで簡単に恨むなら、最初から自分の服なんかを犠牲にしてまで弁解せずいるなんて事…しません」

大隈はジゼルを見つめる。その手に抱えられた壷は、大隈が癒着している壷。つまり未練の象徴とも言えるもの。ジゼルは壷を大隈の側に置き、手を差し伸べた。

「あなたの未練を、解消してさしあげましょう、本意はあなたが直接、奥さんに尋ねてこればいい」

大隈は動揺しながらも、透けた自分の手をジゼルの手に重ねる。
ジゼルは想像した。自分が洋子で、この屋敷が丁度一年前の風景である姿を。

再び目を開くと、そこは先ほどまで居た自室ではなく、玄関だった。
手にはヒビの一つもない壷が抱えられていて、足元には猫がいる。
夢でも見ているのかと辺りをきょろきょろとしていれば、玄関の戸が開き、暑い外から帰ってきたように大きく息を吐き、クツを脱ぐと顔を上げて微笑んだ。

「ただいま」

一年間。たったというには長く感じた一年間、ずっと待ち望んできた一言。
大隈は声がでず、ただ口を動かして壷を置き、走り出す。
きっと彼女は本物ではないのだろう、この空間も全て幻なのだろう、それでも、それでも抱きしめられずにはいられなかった。わんわんと子供のように大声で泣きながら、大隈は強く、洋子を抱きしめる。

『すまなかった…！本当に、本当にすまなかった！俺が…俺が癇癪を起こさなければ…お前は…！』
「なにも泣くことはありませんよ…もういいじゃありませんか、さあ、ご飯にしましょう」
『洋子…洋子、すまなかった…！』

大隈の体が、金色の粒に包まれる。
洋子の姿をしたジゼルは泣き続ける大隈の背中を撫でながら、彼がもう死んでいる為、本当は完全に触れられないのを感じて一人、複雑な思いを感じた。
大隈は洋子、洋子と繰り返し叫びながら咽び泣いていたが、やがて頭まですっかり金色の粒に包まれると、優しい声で一言、

『ありがとよ…』

と呟き、大隈は姿を消した。

大隈が完全に見えなくなってから一言、ジゼルも答える。

「どう…いたしまして…」

パン！と部屋は元の大隈の自室へと戻り、壷は前と変わらぬ姿でそこにあった。
ジゼルは窓を開き、屋敷から飛び降りるとマイク越しに海斗へ伝える。

「任務完了、帰ろう、兄さん」

部屋には一匹、切なげに声を上げる猫が居るばかりで、屋敷は再び静寂を取り戻すのであった。

第三章　亜紀斗のこと

「たった～たりらりら、たったった～」

鼻歌を歌う男が一人、吾妻邸の豪奢な屋敷を見上げていた。
男は横を通れば誰もが一度振り返るほどの美貌を持ち、最近ではモデルなども勤める若手の売り出し最中の俳優であった。
男はどうやって吾妻邸に忍び込もうか考え、鼻歌を歌いながら屋敷をぐるりと回っていたのだが、やがてとんとん、と背中を叩かれ振り返る。
そこに居たのはとてもこの屋敷の後継者とは思えないやぼったい大きな眼鏡をかけた少年で、少年をみるや否や、男は少年、吾妻春斗に抱きついた。

「春斗！久しぶりだね！」
「…あなたもお変わりないようで…亜紀斗（あきと）兄さん…」

にこにこと食えない笑みを浮かべた男、亜紀斗は春斗の背中を押し、無理やり屋敷へと入り込む。

「まあね！積もる話もあることだしお茶でも飲みながら！」
「どうして客の兄さんがそんなこと言うの…や、やめて押さないで！」

そのままの意味でも押しに弱い春斗はそのままぐいぐいの背中を押されながら、自宅へと帰るはめになるのだった。

「帰れ」

ソファーにふんぞり返り、小時間、春斗と談笑していた亜紀斗は、帰宅した海斗に開口一番そう言われて顔をしかめる。亜紀斗が吾妻邸に帰宅したのは五年ぶりの事だったが、愛想のないその海斗の態度に、亜紀斗はため息をついた。

「何だい久々に出世して帰ってきた兄を見てそれはないだろう？そういえば雪那もこっちにいるって聞いたけど…会えないかな？」

「会えん、きもい、帰れ」

「ちょっ、ちょっと兄さん」

三拍子そろった罵声に、呆れ顔をした亜紀斗も、海斗の言うことなど全く耳に入らないように紅茶をすすり、足を組む。海斗の分も紅茶を淹れようと春斗が立ち上がった瞬間、海斗は亜紀斗の胸元を乱暴に掴んで引き寄せる。春斗ならばいつも紅茶をこぼす所だが、取りこぼすどころか、掴まれても尚紅茶をすする肝の据わりように、春斗だけがハラハラとさせられる。

海斗は亜紀斗の顔を睨むと、ぎりぎりと紅茶が飲めない程に首を締め付けた。

「てめぇ、分かってんのか？破門されてんだよ、どうして吾妻家にのこのこ戻ってきてんだ？あ？先輩にいじめられてきたんですかぁ？」

「離せよ下品なヤツだなぁ君は相変わらず。品がいいのは見目だけか、まるで女の子みたいだもんね」

「おい、もういっぺん言ってみろよ…殺すぞ」

おろおろと二人の様子に焦って口も手も出せずにいる春斗に、すっと背後から一人の助け舟が入る。

「兄様…」

びゅん！と掴みかかっている海斗と亜紀斗の真ん中に丁度すれすれ、大きな出刃包丁が割り込み、流石の海斗も驚いて手を素早く離した。

「喧嘩によるダメージ計測、利益の順から計測致します、…」

「ああ、もういい、雪那、悪かった」

「やあ雪那ちゃん久しぶり」

掴まれて乱れた服装を整え、突き刺さりそうになった包丁を雪那に返した亜紀斗はぐるりと兄弟たちを見遣る。五年しか居なかったにしては皆がそれぞれ変わっていたが、特にそれには触れなかった。

「さてと、実はお兄ちゃん、お仕事で色んな所を巡っていたんだ、良かったらお土産あるから貰ってよ」

「わあ、いいんですか、兄さん！」

「私にも？」

「もちろんあるよ、そこのおチビちゃんにもね。はいこれ背が伸びるおまじないの人形」

「要るか、きったねぇ人形寄越してくるんじゃねぇよ」

ぶすっ、と不機嫌になった海斗は渡された趣味の悪い人形を突き返してそのまま部屋を出る。

亜紀斗はそんな海斗の態度に肩をすくめたが、気を取り直して鞄から他のお土産を取り出した。

「はい、不運な春斗にはこのお守り、幸運のお守りらしい、お兄ちゃんだと思って大事にしてね」
「ありがとう…不運は余計だけど…」
「雪那にはこれ、似合うだろうと思ってペンダント…」
「感謝します」

亜紀斗は雪那の首にペンダントを掛けてやり、真っ白なうなじに視線を落として押し黙った。五年前と明らかに違う彼女の態度。その原因は知っていたが、こうして性格が変わってしまった雪那に会うと一人、複雑な気持ちになった。きっとそれは海斗も同じなのだろうが、やはり気持ちは晴れない。

「雪那はいつもは屋敷にいないんでしょ？今日はたまたま屋敷に戻ってきてくれてて嬉しいよ、いつまでいるの？」
「五日程、父上様にもまだ居るようにとおおせつかっております」
「…そうか」

雪那はそう一言返すと、べったりと恋人同士のように春斗に張り付き、亜紀斗は苦笑いをする。これだけは性格が一変してしまう前から変わらない。性格が変わっても、彼女は雪那なのだと自覚する。

「そういえば兄さんはどうして帰ってきたんですか？絶対帰ってこないって言って出て行ったくせに」
「ははっ、実は俺、お前に宣戦布告しようと思ってさ」
「宣戦布告…？」
「俺、ジゼルになりに来たのよ」
「へっ…？！」

波紋が広がる。
吾妻家に破門された長男、亜紀斗の一言に、春斗はただただ何も言

えず立ち尽くす。
一方宣戦布告をした張本人は不敵に微笑み、カップを突きつけて平然と告げた。
「おかわり」

二話

一方の海斗といえば、亜紀斗を突き放して部屋から出た後、海斗はある男の部屋へ訪れていた。数回ノックをすればどうぞ、と声が掛かり、海斗はドアを控えていたメイドに開かせ、数歩歩き出す。パソコンに向かい合っていた男は顔を上げ、にっこりと微笑んだ。

「どうしましたか、海斗くん、僕の部屋を訪ねてくるなんて珍しいですね」

「亜紀斗が帰ってきた…暫く滞在するつもりなら俺はその間家を出たい」

「ああ、亜紀斗くんが帰ってきたのは知っていますよ、でもいけません、わがままを言うのは」

物腰が柔らかな態度の男はこの家系の人間らしく、やはり端整な顔立ちをしていた。

微笑むと目尻にしわが寄ったが、外見年齢にして三十台半ばといった所だろうか、海斗は男の顔を見ない様にうつむいていた。男の顔は亜紀斗の顔にとてもよく似ていたからだ。

男はパソコンを落として椅子から立ち上がる。海斗は少し顔を上げて男を見遣った。

大きなガラス窓から、吾妻邸の綺麗な庭園が望める。

男は後ろに手を組んで、小さくため息をついた。

「それとも…まだ春斗に負い目がありますか？」

「…負い目なんか…ねぇけど…」

「亜紀斗くんと関わると、君はいつもそんな顔をする。ねえ、海斗

くん僕たちは家族なんだそんな顔をしないでおくれ、破門したからといって、彼を完全に家から追い出そうと思ったわけでもないんだよ」

「…どうかな」

海斗はそれだけ伝えたかったのか、これ以上話すつもりはないように踵を返した。

男は別段、止めることもせず、海斗に声を掛けた。

「海斗くん、一つ約束だ。」

「なんだよ」

「お父さんと居るときぐらいは、もっと素直になりなさい」

海斗は一瞬足を止め、男の言葉を聞いていたが、返事をすることもなく、男の書斎から立ち去った。

男―吾妻七生（あがつまななお）は苦い顔をして再び椅子へと深く腰掛ける。

この吾妻家に妙な亀裂を生み出した原因は、ジゼルという存在だけではなく、自分のせいでもあるのだ。七生は机に飾ってある妻の写真を取り、そっと指先で撫でた。

もう会うことは叶わない、死んだ美しい妻の写真を…。

紅茶の空のカップをトレイに乗せ、広い邸宅内を歩いていた春斗は、

向こう側から歩いてくる海斗の姿に足を止めた。
その両手には大きな荷物が抱えられており、一目見て旅行か何かに行くのはすぐ分かった。

「兄さん…？何処か行くの？」
「友達の家、俺しばらく家出るから、仕事の時は呼べ」
「えっ、お泊まり…？でも急になんで…」
「ああ、ついでに。あの野郎が屋敷からいなくなったらすぐ呼べ、いいな」
「あ、ちょっと兄さん！」

両手がトレイで塞がっている春斗は海斗を引き止めることも出来ず、ぽつん、と広い廊下で立ち尽くす。
ジゼルになりにきたと宣言した亜紀斗の事を相談しようと思っていたが、あの様子でそんなことを言えばまた口論になりかねない。
春斗は面倒ごとにまた巻き込まれたと嘆息し、キッチンを目指して再び歩き始めるのだった。

三話

夕食時、亜紀斗が帰宅してきたのにも関わらず、咎めることも、歓迎することもなく、七生は一緒に食事を摂り、屋敷に居なかった五年間の事をただ、亜紀斗に尋ねた。
それはまるで破門されていたのが嘘のようで、亜紀斗も亜紀斗で楽しそうに五年間の俳優生活について語り、雪那はもとよりそんな会話に口を挟まない。
春斗だけが、何故だか居心地の悪い気持ちを味わいながら食事をし、あまり喉を通らなかった。

食事が終わり、デザートを口に運んでいた亜紀斗は、思い立ったようにスプーンを置き、七生をひたと見つめる。七生は視線を感じていながらも、デザートから顔を上げなかった。

「父さん、話があるんだけど…いいかな」
「構いませんよ、どうぞ、ここでお話なさい」

妙な緊張感がダイニングに広がる。春斗は今すぐに席を立ってしまいたい気持ちに駆られたが、思いとどまり、隣の雪那を見つめる。雪那は七生と亜紀斗の両方をぼんやりと眺めている様子だった。

「俺さ、長男だろ。ジゼル…継がせてくれないか？」

カチャン、と七生が生み出す食器の触れ合う音がやけに反響し、七生は漸く顔を上げて亜紀斗を見つめた。

「五年前、言ったはずです。あなたには永遠にジゼルを継がせない

と。どういう風の吹き回しでそんなことを思ったか、言いなさい」
「別に、俺にはやっぱり吾妻家を継ぐ責任があるかなって…そう思っただけさ、ふらふら五年間遊んでたらそう思えてね」
「今は春斗くんがジゼルを継ぐべく、頑張っているではありませんか、何が不満なんです？」

口元を拭い、七生が尋ねる。
亜紀斗はチラッ、と何故か雪那を一瞥し小さな声で別に…と返した。

「だったらいいでしょう、それに五年前と同じ事を繰り返してはなりません…、いいですね」

七生はそれだけ告げると席を立ち、自室へと戻っていった。
亜紀斗はただ七生が去っていく様子を目で追い、食べかけのデザートを追いやって机に突っ伏す。
春斗はそんな亜紀斗を思い、側に寄って肩を叩いた。

「兄さん…そんなに落ち込まないで…今の仕事がうまくいってないの？ジゼルなら僕が頑張るから…兄さんはゆっくり磯城川で仕事を探せばいいじゃないか」
「離せよ、なぐさめてくれるな、春斗。俺はまだ、諦めてないからね…それと、別に仕事がうまくいってないわけじゃないさ、大丈夫」
軽く手を振って春斗の手を払いのけた亜紀斗は、頭を抱えて七生に続くように部屋を出た。
食器を片付けるメイド達の様子を眺めながら、雪那は春斗に振り返った。

「亜紀斗兄様は…どうかなされたのですか…？」
「ああ…そっか…雪那はまだ小さかったもんね…まあ僕も二つしか

離れてないけどさ…兄さんはジゼルに一度もなったこと…ないんだ」

振り払われた手をじっと見つめながら、雪那に笑顔を向ける。

こうして家族がバラバラになってしまった原因の一つは兄、亜紀斗の事があった。

彼が破門される原因ともなったその事件は長らく、彼が居ない間もずっと吾妻家に引っかかりのようなものを生み、春斗はいつもその事件を心に刻んで仕事をしている。

五年前の事、春斗は十歳だった。

四話

吾妻亜紀斗は、ジゼルを代々継いだ家に生まれた長男、ジゼルを継ぐべくして生まれた存在であった。

彼の父、七生が行ってきた怪盗業、ジゼル。彼はジゼルで養われた想像力を生かして小説も執筆しており、表向きは小説家裏家業は怪盗業といった正に小説の中のような人生を送ってきた。
若くして妻を娶り、亜紀斗が誕生してからはジゼルをやめ、子供と妻に尽くす日々。

そんな風に愛情を注がれ生まれた亜紀斗は一つ、致命的欠点があった。

それはジゼルとしての能力がないこと。
生まれてすぐに能力に目覚めるということ自体は稀だが、やがて人格が形成されてくる辺りには既に能力が目覚め、想像一つで世界を変えることが出来る。
だがその能力が五歳を過ぎても芽生えず、海斗が生まれ、二歳で能力が開花し、亜紀斗はその負い目を感じつつも自分の能力が芽生える日を待ち続けた。

「亜紀斗兄ちゃん…」
「あっちに行けよ…僕に構わないでくれ！」

しかし彼がジゼルとしての能力を芽生えさせる日は終ぞ来ず、長男

であるのにも関わらず、本業のジゼルが継げないという焦りと、兄のプライドが交差し、いつの日からか海斗を疎むようになる。

その後、春斗が生まれ、雪那が生まれ…自分一人だけが所有しない能力に、亜紀斗は疑問すら感じて七生に詰め寄る。何かがおかしい、自分は本当にこの家の子供なのか？

だが返ってくるのは穏やかな一言、そうですよ、お母さんに聞いてごらんなさい。

しかしその母も他界し、疑心暗鬼に駆られた亜紀斗は五年前、十八の頃、夜中に海斗の部屋に忍び込み、衣装を拝借する。

彼の衣装はとてもじゃないが小さく、身に着けることは出来なかったが、彼の衣装と共に仕舞われていた七尾の衣装を見つけ出し、着用する。

やはり額にはジゼルの能力の証であるダイアのマークは現れなかった。

ジゼルであれば、脚光を浴び、夜の街を自由に移動して想像のままに全てを動かせる。

家業であるのにも関わらず、自分だけが取り残されたその世界にすっかり魅了されていた亜紀斗は、衣装を手に、海斗と七生が正式なジゼルの仕事として、予告を出す日を待った。

能力がなくても美術品を盗み出すだけの身体能力を持っていると自負していたし、失敗などは頭に無かった。ただ、美術館の柵の向こう側、テレビの向こう側の視聴者のような高揚感に酔いしれていたのだ。そのときはまだ、気づくこともなかったのだが…。

『ジゼルが犯行予告した近代美術館前です、辺りは既にジゼルを待つ人々で溢れています！』

テレビの中継車が数台停まる美術館前、既に閉館した美術館前にはカメラや携帯を手にした一般人、報道者が混ざり合い、夜中だというのに賑わっていた。
サーチライトが美術館の中、外装を隈なく照らす中、亜紀斗は木の影に潜んで、中に侵入する機会を伺っていた。見張りの警官たちがぐるぐると取り囲む中、一人、どくどくと胸の鼓動が高鳴っていた亜紀斗はここに来て、ようやく自分がしでかしている事の大きさに気づき始めていた。

だが気づいたところでもはや後戻りすることも出来ず、海斗は七生の衣装を盗んでこうして亜紀斗が隠れていることお知らずに美術館にもうすぐ乗り込む。
そうなればいくらジゼルの能力がない亜紀斗も海斗をおとりに紛れ込めると確信していたのだ。

活躍する、という意識はあまりなかった。
ただ自分ならば出来る、そう信じていたのだ。

案の定海斗がうまくおとりになり、警備が薄くなった美術館に忍び込むことに成功した亜紀斗は、目的の品が飾られている展示室を海斗に見つからないように目指す。
海斗は追われているため、その位置を知るのは容易い。

展示室に辿り着いた時、見張りの警官達が取り囲む展示室に用意していた催涙弾を投げ入れた亜紀斗は口を覆い、展示室に一番乗りで

入り込んだ。

ここが、ジゼルの風景。
美術品だけを照らす小さな明かりだけがこの部屋の照明全てともいえる薄暗い部屋。
照らされ、輝く巨大な宝石を眺め、亜紀斗は手を伸ばす。
サイレンが鳴らないように触れることはしなかったが、赤く光る宝石は亜紀斗の指先をピンク色に染め、触ってくれと言わんばかりに輝く。

恍惚として宝石に見とれていた亜紀斗は忘れていた、これが霊の未練の証であることを…。

五話

突如頭に鈍い痛みを感じ、亜紀斗はつんのめって地面に伏せた。
激しく頭を強打されたのか、中々立ち上がることが出来ず、かろうじて振り返れば、体が半透明の女がそこに立っていた。その姿は既に、人型を保っておらず、薄く開いた唇から見える歯は人間のものではなく、獣のたぐいのようで、濃い霧のような気体を吐き出している。
亜紀斗は強烈な恐怖心に駆られ、痛みが過ぎ去っても立ち上がることが出来ず、腰が抜けたまま地面を這って女…であった悪魔を凝視する。

女は腕を大きく振りかぶり、すんでで避けた亜紀斗だったが、腕が鋭い爪によって裂け、つい大きな悲鳴を上げてしまう。

遠く聞こえていた喧騒も今は掻き消え、目の前の恐怖だけが亜紀斗を支配していた。

通常、自我を失ってしまった悪魔は未練の対象を自我を保っている間に解消しない限り成仏させることは出来ない。悪魔となった以上、ジゼルの力をもってでしか悪魔は倒すことが出来ないのだ。
まだ悪魔になってないだろうと油断していた自分を恥じて、亜紀斗は死を感じていた。

こうなれば海斗が撒いてくる頃には既に自分は肉塊と化し、目の前の悪魔に貪られていることであろうと。

身に纏ったジゼルの衣装から、懐かしい父の香りがする。

亜紀斗は自分の愚かさに涙が溢れ、視界がかすんでいった。
悪魔は振り下ろした爪が地面に食い込んで苦戦したがそれももう終わり、爪をようやく地面から剥がすと再び亜紀斗を見据えている。
再び悪魔が腕を下ろした瞬間、亜紀斗は静かに目を閉じた。

しかし、衝撃は中々訪れず、代わりに耳に聞き覚えのある声が数度響く。意識を失いつつあるのかその声は遠く、亜紀斗は数分、彼にとっては長く感じたその間目を閉じていた。
だが鋭い叫び声がしたのに反応し目を開けば、視界が暗い。何かで遮られている。

そして額には生ぬるい液体が流れてくる。血だ、直感した。

「なんで…こんな所に…いるんだよ…」

遮っていたのは細く、頼りない体。
その体に突き刺さった悪魔の爪と、相打ちにしたのか、悪魔はすっかりと力をなくして海斗の体にぶら下がっている。
悪魔の体は消滅する為、パン！と悪魔が弾けた瞬間、海斗の体から血が溢れ、海斗は膝をついてしゃがみ込んだ。

亜紀斗は混乱から悲鳴をあげ、強く海斗の体を抱き寄せて血が滲む傷口を両手で塞ぐ。
だがそれでも血はとめどなく溢れ出し、海斗は呟く。

「じっとしてろ…、今…家に…」
「どうして…ここに来れたんだ…、追われていただろう！」
「はは…馬鹿だな、俺たちはお前と違って…想像すればこの世の理を…捻じ曲げることが…できる…それで…想像した…」
「何を…！？」

ふっ、と海斗は微笑んで、目を閉じる。

「お前の…目の前にいる俺の姿を…」

それから、海斗は一命を取り留めたものの、ジゼルとしての能力を半減させてしまい、ジゼルをやめることになった。
彼がジゼルになるまでの数年間は亜紀斗が担うはずだったのだが、肝心の能力がない。七生が現役でしばらく海斗の指導をし、亜紀斗はジゼルを任されることなく結局家を出ることになったのだ。

家を出ることになったその日、別宅で過ごしていた春斗が丁度屋敷にやってきていた。

初めてみる三男の姿に複雑な思いを抱きながら、亜紀斗は春斗の肩に両手を乗せ、諭すように告げた。

「お兄ちゃんはすこし、悪いことをしちゃってね…家を出ることになったんだ。会ったばかりなのに…残念だよ…春斗、君はとても高い能力をもっていると父さんに聞いた。俺は手に入れることすら出来なかった能力だ、きっと、家業を継いだ時に正しいと思う方法で…使うんだよ、俺は間違ってしまったから…」

「何処にいくの？」

「何処だろう…何処だろうな…」

ぼろっ、と亜紀斗の瞳から涙が溢れ、春斗はきょとんとしてその背中を撫でる。

「また会おう、春斗、お兄ちゃんそれまでに頑張ってくるから…強くなるからね」

「うん、バイバイ」

小さな手のひらが見送る中、亜紀斗は家を出た。

七生は破門、といったものの、この家に居ないほうが亜紀斗の為だと思っていた。

彼が劣等感を抱くのは、何より家を大事に思っているからこそ。家を継ぐべき長男という役を失えば少しは軽くなるだろうと考えたのだ。

「これでよかったんだろうか…伊織（いおり）…」

もう隣で頷いてくれる妻の姿がない七生もまた、そう一人で呟き悔いる。

亜紀斗が再び吾妻家へ戻ってくる五年後まで、何度も、何度も…。

五話（後書き）

何だか暗くなってきましたが、また普段のようなお話に戻ります。
とりあえず家族の事を書きたくて…。

第四章　美少女とガラスのピアノ

亜紀斗がやってきてから数日。
仕事のことは七生、もしくは海斗から一年前に死亡し、この世に未練がある霊が居る、もしくは悪魔にすでに憑依されている美術品や人間が特定されると連絡がある。
すっかり亜紀斗も屋敷に溶け込み、俳優業に戻る気はないのか、特に何をするでもなく家にいる。

春斗は亜紀斗が妙な事をしようとしないか不安ではあったが、そうやって家に居るのにも慣れ、今までの生活が海斗から亜紀斗にこき使われる日々に変わったぐらいで春斗自身も変化はない。

そろそろ仕事があるのでは？と思っていた頃、春斗の携帯に着信が入る。
これもジゼルの力が影響したのではないかと思えるほど、ぴったり、着信は久方ぶりに兄、海斗からのものだった。

「あ、もしもし兄さん…？久しぶり…今何処に居るの？」
『だから言っただろうが、友達の家、ったく面倒だな霊が察知できるっていうのも…』
「いつも思うけどどうやって場所まで把握してるの？」
『夢でみるんだよ、俺も親父も。そんなことはどうでもいいだろ、お察しの通り仕事だ仕事！』

海斗は余計な会話を嫌う。
会話を好む亜紀斗とは打って変わってこの性格な為、久しぶりのそ

の反応に慌てながらも春斗はメモを取る。
場所は磯城川からさほど離れていない場所、美術館だった。

『今回は悪魔だ、気をつけろよ、自我がない。ここの所俺らを警戒して警備も厳重だ、もちろん捕まるのも駄目だ、いざとなったら力を使って逃げろ』
「わかった」
『あと亜紀斗に妙な真似させんじゃねーぞ、テレビにあの野郎映ってたらただじゃ…』
「おかないって？」
「うわっ！」

メモを取るのに真剣になっていた為か、背後から寄ってきていた亜紀斗に気づかなかった春斗はまんまと携帯を奪われてしまい、亜紀斗はにこにこと携帯から聞こえる海斗の罵声を受け流していた。どうやらまた一方的に電話を切られたらしく、はい、と通話が終了した携帯を春斗に返す。
春斗は大きくため息をついて携帯を受け取った。

「に…兄さんやめてよ…海斗兄さんを刺激するの…僕がまた怒られるでしょ…」
「ひどいな、俺が海斗に怒られるのはいいの？」
「いやそういうわけじゃ…」

なるべくメモは見せないようにと前かがみになっていたがこれもあっさりと奪われ、春斗は青ざめながら必死に取り返そうと手を伸ばす。身のこなしはいい亜紀斗はひょいひょいとそれをかわしながらメモを記憶した。

「ふうん、今回は県立美術館か…結構古い建物だね、大丈夫？」

「兄さん！兄さんは家で大人しくしていてくださいねっ、海斗兄さんだけでなく、父様にまで叱られてしまいますから！」
「はいはい」

メモを指先で放り、そのまま手のひらを振って亜紀斗はリビングから出て行った。
床に落ちたメモを拾い、今だその真意が知れない兄に呆れつつ、春斗は携帯を見つめる。
嫌な予感ばかりが胸の中に残る、どうか何も起きませんよう、裏切られてばかりいる神に祈り、春斗もその場を後にした。

二話

「いたぞ、逃すな！」

美術館の警報音を聞きながら、とても常人では成し得ない速さで廊下を駆け抜け、ジゼルは今夜も仕事をこなしていた。毎度、悪魔や霊を祓う時には警備員たちの目を逸らせる工夫が必要な為、今回は一箇所に集め、全員眠らせてから仕事を完了させる。
あとは帰還するだけとなったのだが、そう簡単に返してくれるはずもなく。
左右に分かれた廊下ではジゼルを挟み込むようにした大勢の警備員や警官が押し寄せ、すんで掴まれるという所で大きく飛び上がると、一人の警備員の頭を踏み台に、ジゼルは窓から飛び出した。

窓から飛び出せば後はこの美術館の構造上、そのまま落下すれば外壁の向こう側。
普通の人間ならば死んでしまうかもしれないが、ジゼルの想像する、という能力で飛び出した瞬間、着地しているイメージがあれば死ぬことはないし、見つかることもない。

少し振り返ってこちらに手を伸ばした警備員達にいつものように敬礼を一つ、ジゼルは今宵も闇の中へと姿を消した。

「きゃああ！」

ガサッ！と茂みが揺れる音と、着地に失敗し、頭から生垣に突っ込んでしまったジゼルは小さな悲鳴に驚いて顔を上げた。
美術館の外はあまりマークされてなかったが、もしかして一般人にでもぶつかったのかと慌てて体制を直して見渡せば、目の前にいたのはジゼルより幼いような、少女が一人。
それもまるで民家のような風景の中に佇んでいる。一体ここは何処なのか、イメージを間違ったのか。
混乱する頭は小さく先ほど聞いていた美術館の警報音を拾い上げ、まだここが美術館に近いことを悟る。ジゼルはなんと声を掛けようかと迷い、怯えた少女を見つめていたが、口を開いたのは少女が先だった。

「あなた、隣の美術館からここに逃げ込んできたのね！」
「えっ、と…隣…？」

ジゼルは背後に振り返る。ここはどうやら彼女の家の庭らしく、仰ぎ見れば高く美術館の壁が目に入る。確かに、すぐ側にあったようだ。美術館の外壁の横には車がやっと一台通れるような道があったが、どうやらイメージが薄すぎた為か、その道路ではなく、一本進んだ彼女の庭に落下したのだろう。
本来ならば四階から落下したとはいえ、道路を越えて庭まで飛んでくることなどあり得はしないのだ。

「ねえ！」

少女は座っていたテラスの椅子から少しだけ上半身を乗り出し、ジゼルを見据える。
暗くて最初見えなかった少女の端整な顔立ちが月夜に照らされ、ジゼルは思わず一歩引き、少女の姿を目の留める。

美しいウエーブのかかった銀髪が夜の冷たい風に揺れている。
どうやらこの国の人間ではないのか、目は湖畔の美しい水底を映したような淡い青色で、真っ白な肌がぼんやりとした闇夜に浮かんでいてそれは一目目にしただけで美しいという感想他者に抱かせる。
今にも折れてしまいそうなほど頼りない指先が、そっとジゼルの服を掴んだ。

「お願い、あなたがここに来たこと、誰にも言わないから明日もここに…来て欲しいの」
「えっ…でもそれは…」
「出来ないとは言わせないわよ、今すぐ家の人を呼んだっていいんだから…来なかったら警察に言ってあなたが来たことを話すわ」
「わ…わかった、じゃあ明日、またここに来ます。でも…どうして僕にそんなことを…？」
「いいから！約束よ！」

遠く、少女の悲鳴を聞きつけたらしい使用人の声がジゼルの耳にも届く。

「お嬢様！？どうかなさったのですか…？！」
「早く、行って！」
「待って最後に、」

ジゼルは椅子から立ち上がりこそしなかったが、背中を押してくる少女に振り返り、尋ねる。

「君の名前は？」

少女は使用人が近づいてくるのを焦って見つめながら、口早に音も

なく呟き、もう一度ジゼルの背を押した。
ジゼルは少女の唇を読み取り、彼女がもう一度背中を押した瞬間にはまるで魔法のようにどろん、と姿を消してしまうのだった、これはもちろんここから出る自分の姿を想像したに過ぎないが、彼女は驚き、椅子からつい倒れてしまう。

駆けつけてきたメイドは急いでそんな彼女を救い出し、再びテラスの椅子に座らせた。

「大丈夫ですか、お嬢様…先ほどは…悲鳴が聞こえましたが何か…？」
「…なんでもないわ佳代（かよ）、野良猫に驚いただけ。紅茶をこぼしてしまったから新しいのお願いね」
「…畏まりました」

メイド、佳代はもう一度少女を見つめてその場を後にする。
少女は安堵の息を吐き、まだハプニングに高鳴る胸を押さえつけてつい、笑みがこぼれるのを我慢できずにワンピースを掴んではにかむ。

「母さん…私、すごいものを見ちゃった…」

誰がいるでもない空間にそう呟いて…。

三話

「シルヴィア…か…」

一人、自室で出会った少女のことを思い出していた春斗は、深くため息を吐き出した。
何故こうも自分はヘマをしてしまうのか、という自責と、彼女に会うときはどうしたらいいのだろうか、という悩み事が相まって、うまく脳内を整理できない。
一人で寝るには大きすぎるベッドに転がり、春斗は部屋から見える大きな満月を見つめた。

春斗はこの屋敷にきてからというもの、美しい人というのが特別苦手に思えた。
彼女もまるで自分の妹を連想するようで苦手意識が払拭できず、明日の逢瀬がとてもじゃないが楽しめるはずがない。

美しい人が苦手、というのは春斗の心に残り続けるコンプレックスの塊のようなもので。
普段学校に通っている時にしている姿こそ、春斗が一番落ち着いていられる姿だった。厚いレンズで端整な顔立ちを隠し、長い髪をやぼったく結んで人を避け、前髪をだらりと伸ばし、人に慕われず、憎まれず。そういう人間関係を好んで生きてきた為、今までできた友人というのも慧ぐらいだろう。
学校で親しくしている慧の前でも絶対に眼鏡ははずさないし、髪もほどかない。
そもそも髪をほどき、眼鏡をはずしたぐらいで容易くジゼルだとバレてしまうし、それでよかったのだが、慧はことごとく春斗に自信

を持てと言われてきた。
そう言われるたび自由に、自分に自信を持って明るく生きている慧が眩しく思えるのだ。

「春斗くん、いいかな」

ノックの音の後、七生が顔を少し覗かせる。春斗は思わずベッドから飛び上がると背筋を伸ばして座りなおし、七生に向き合った。

「父様…、どうかなされたんですか？」
「いやね、春斗くんが好きなパワフルプリンくん、食べないかなって…」

ぶらり、ととても有名作家で元ジゼルであるセレブとは思えぬ姿でコンビニ袋を下げる七生に、ふっと春斗は頬を緩めた。

「父様、またぶらぶら出歩いて…海斗兄さんに怒られますよ」
「いいんですよ、彼は今、家出中なんですから」

春斗はあまり、七生と会話をしたことがない。
七生自身、あまり子供と会話をしたりする方ではないので、妙な空気が春斗の室内に流れる中、プリンのカップを片手に七生は春斗に尋ねた。

「ねえ、春斗くん。どうしてこのプリンが好きなんです？お父さんも美味しいとは思いますが…昔からこればっかり食べているので」
「え…あれ…なんで…だろう…あまり覚えていなくて…」

思い返せば、春斗のことをよく知らないクラスメートですら春斗がパワフルプリンくんを好きだということを知っているぐらい春斗の好物であるのに、春斗でも、どうして好きになったのかよく思い出せない。そもそも春斗にはこの屋敷に来るまでの記憶は曖昧で、屋敷に来る前のことを春斗が七生や海斗に尋ねても適当に受け流されることが多かった。
どうして別宅で暮らしていたのか、それすらも今では曖昧でよく覚えていない。

「そうですか…まあ好物というのはそういうことが多いですね…」
「父様は…何か好きな食べ物ってあるんですか？」
「私…？うーん、そうだねぇ…あまり考えたことなかった…私もこのプリンが好き…なのかもしれないですね…ああそれと伊織のご飯…でしたよ」
「母様の…」

七生はにっこりと春斗に微笑み、伊織の姿を思い浮かべる。

「春斗くんは会ったことありませんよね…亡くなってしまってから私は君に出会いましたから…」
「写真、見ました。とても綺麗な人ですね…、僕も食べてみたかったな…母様のご飯…」

七生はひたと春斗を見つめ突然無言になる。
何かまずいことでも言ったかと口をつぐむが、彼はただ悲しげな表情一瞬しただけで、再び笑顔になった。

「春斗くん、最近お仕事がうまくいってないと聞きました。嫌…ですか、ジゼルは」

春斗は食べかけていたプリンを詰まらせ咳込むと背中を優しく撫でてくれる七生に感謝し、カップをテーブルに置いた。
正直な気持ちを伝えるべきか悩み、答える。

「よく…わからなくて…。盗むのはもう嫌だとは思うんです…犯罪ですし…でも、それで悪魔を祓えなかったら、亜紀斗兄さんみたいに怪我をするどころか死んじゃう人だっている…そう思うと…遣らざるを得なくて…」
「この家系に生まれたことで、初代ジゼルの贖罪をしてまわる運命となったことを、申し訳なく…思います。」
「贖罪…？」
「ああ、春斗くんは成り立ちについてまだ知りませんでしたね…まあ、このことは追々…。私は、君がどうしても苦しいのならば、ジゼルをやめて、亜紀斗くんに継がせた方がいいかと思ってね…」
「え、でも…兄さんは…」

そっ、と七生は子供にするように春斗の頭を撫でた。
春斗は驚いて七生の平べったい手のひらが動くのを見つめていたが、やがて手を止め、七生は真剣な面持ちになる。

「あの子が何の兆しもなしに吾妻邸に返ってくるとは思えません。きっとジゼルとして働ける何かを身につけたのでしょうね」
「それって、能力が開花した…って事ですか？」
「さあ、どうだろうね…、春斗くん。亜紀斗くんは君のお兄さんだけれども気をつけるといい。彼は野心家だからね…」

空のカップを回収し、七生は立ち上がって春斗に向き合う。
海斗も気をつけろ、と言っていたが一体どうしてそんな事をいうのか、春斗には理解が出来ず、春斗も立ち上がると強く返す。

「僕は…亜紀斗兄さんを信じていますから…兄さんが何か悪いことというかジゼルに関してどうにかしようだなんて思ってないと…信じています」
「…そうだね、私も父親失格かな…信じてあげるべきなんだろうけど…まあ、一応頭の隅には置いておきなさい。じゃあ私はこれで失礼しようかな、おやすみ、春斗くん」
「はい…おやすみなさい父様…」

七生が出て行くと一人になった春斗は、再びベッドに倒れこんで天井を見上げた。

七生が来る前よりすっきりした気分を感じ、春斗は微笑む。
すっかりその頭の中から少女、シルヴィアの事は薄くなってゆき、彼が翌晩の犯行時刻に慌てるのは言うまでもない。

四話

夜。
昨晩シルヴィアと約束したのを漸く思い出し、春斗はジゼルの姿に着替えて静かに目をとじた。
思い描いたのは昨晩落下した美しい庭。
ふわっ、と春斗の髪の間に柔らかい風が吹き抜けてゆき、再び目を開くとそこはシルヴィアの邸宅だった。

昨晩と同じようにテラスに座っていたシルヴィアは、なるべく悲鳴を出さないようにと両手で口を押さえていたが、やはり驚いていた。
突然眺めていた庭にジゼルが現れたのだ、無理もないだろう。
そして春斗が数歩歩み寄ると、小さく笑ってシルヴィアは微笑んだ。

「約束、破るのかと思ったわ。泥棒さんだし」
「ひどいですね、善良な泥棒に向かって」

春斗は、シルヴィアの向かいにある椅子を引き寄せ、彼女に顔が見えるように座り、顔を上げた。

「それにしても…どうして私なんかに来て欲しいと思ったんですか？私は、あなたが言うように、泥棒ですよ？」
「…私、家を出たことがないの。生まれて何度かしか…。足が悪くて…それで寂しくて…つい」

長い上品なワンピースから伸びた足が春斗の視界に入る。その足は長らく使っていない事を示すようにしなやかで美しく、そして弱弱しかった。

春斗は苦い表情をしながら、シルヴィアの足を眺めていたが、やがて彼女に視線を戻す。
彼女は春斗ではなく、どこか遠くを見つめていた為、視線を追う。
その視線の先には見たこともないような美しい楽器が部屋を占領するかのように置かれている。春斗はその美しさと珍しさに息を飲み、シルヴィアに尋ねる。

「あれは…？」
「お父さんがくれたの。私が寂しがらないようにって、随分前に。でもあのピアノは見ての通りガラスでできているから、弾くことはできないの。音は通らないし、鍵盤を強く叩くこともできないから」
「その…お父さんは？」
「海外に出張で…貿易会社の偉い人…なんだって」

ぽつぽつと思い出すように呟きながら、シルヴィアが答える。母親は？と聞くのが何だか躊躇われて聞かなかったがこの調子では母親もいないのだろう。
広い屋敷に、使用人と小さな子供が住まう空間。まるで自分に重ね合わせるようにシルヴィアの境遇を想い、春斗はシルヴィアに手を差し伸べた。

「車椅子に座って、私はあなたのピアノが聴いてみたい」
「えっ？言ったでしょう…あれは…」
「大丈夫です、私を信じて。さあ、」

シルヴィアは躊躇いながらも、ジゼルの手を取り、お姫様抱っこされると車椅子に移動してピアノの前まで自分で漕いでいった。
ピアノは一応は音が鳴るように作られていたが、ピアノとして本格的に使うのは初めてだった。

ポン、と軽い音が鳴る。それはまるでガラスであることを忘れさせるような透き通る澄んだ音で、シルヴィアの指先が自然に鍵盤に寄せられ、音を奏でる。
春斗の力のお陰でピアノが鳴っているとも知らず、シルヴィアは嬉しそうに鍵盤を叩き、演奏を続けた。

「夢みたい、このピアノで音が奏でられるなんて」
「想像すれば、いつだって君のものだよシルヴィア、寂しい時はこれを弾くといいですよ」
「あ…」

演奏が止まり、シルヴィアはぴたりとそれに合わせるように動かなくなる。
ややあってシルヴィアは春斗を見上げて、悲しげな表情をした。

「もう…会えないの？」
「私にも、お仕事があるんです、君と毎日は会えない」
「じゃ、じゃあ、お仕事が少ない日でいいから…お願い…もう数年ぶりなの、こんなにおしゃべりするのは…！」
「シルヴィア…」

両手で春斗の服を掴むシルヴィアに、なんと返すべきか春斗は悩む。ここで彼女の話し相手になることに嫌悪感はないが、これがいつまでも続いてしまってはジゼルの正体が露見しかねない。
春斗は暫く逡巡し、やがてシルヴィアの指先をそっと解いてやりながら返した。

「毎日は来れない、けれど来れる時にいつでも来ますから、そんな顔をしないで下さい」

安心したかのようにシルヴィアは素直に頷き、帰ろうとする春斗の背中に向かい、声を掛ける。

「もしよかったら…あなたの…あなたの本当の名前を教えて欲しい」

春斗はゆっくりと振り返り、微笑んだ。

「春斗…」

ふっと、名前を告げ春斗はシルヴィアの家から姿を消した。誰もいなくなった庭を見つめながら、シルヴィアは車椅子で少し移動する。

「ハルト…。ハルトっていうんだ…」

五話

翌日、学校へと向かう最中、シルヴィアの邸宅を通り掛かった春斗は、ふとある事に気がついて足を止めた。正面からシルヴィアの家を眺めるのは初めてだったが、それは一目で分かるほど異様な光景だった。
玄関口にあるポストが、まるで数年前から見ていないように郵便物が溢れていたのだ。
この屋敷には足の悪いシルヴィアの他に使用人がいるはず。買出しなどに行っていればポストも見るだろうが、地面に落ちているほどの郵便物を見る限り、あまり外に出ていない事が伺える。

春斗は学校に遅刻するのも承知で、玄関前の門を押す。格子扉がゆっくりと開き、声をあげる。

「すみません、どなたかいらっしゃいませんかー！」

地面に落ちていた分もまとめて郵便物を抱え、春斗は玄関へと向かう。
そんな春斗の声に気づいたのか、ドアが数センチ開いて、中から顔色の悪いメイドが顔を覗かせる。
音もなく返事もなく現れたメイドに、少しばかり不気味さを感じながらも、春斗は郵便物をメイドへと差し出した。

「あのっ、シルヴィアの友達なんですけど…ちょっと寄ったら郵便受けがいっぱいだったので…」

じとり、とメイドは春斗を睨む。

もしかしたら睨んでいるつもりはないのかもしれなかったが、その鋭い眼光に一瞬怯んだ春斗は、ぐいっ、と郵便物を押し付けるようにして渡し、くるりと半回転する。

「勝手にすみませんでした…それじゃ…」

「お待ちください」

しかしそんな春斗を引き止めるように、メイドは春斗の制服を引っ張る。

春斗は驚いて倒れそうになりながらも再びメイドに向き合った。

「まだ学校の時間は大丈夫ですか？折角なのでお嬢様にお顔を見せてあげて下さい」

「あ…えっとでも僕は…」

「お嬢様はお友達がお少ないのでございます、どうか…」

元々この屋敷に立ち寄った時点で遅刻。腹を決めたのか、春斗はそのままメイドの後に続き、屋敷へと入っていった。ここの所こうして大きな屋敷に訪れることが多かったが、どうにもシルヴィアの屋敷は人の住んでいる気配が薄い。

屋敷の玄関の四隅にはくもの巣が蔓延り、あらゆる場所に大きな埃が吹き溜まりになっている。

春斗はそれらに視線を遣りながら、靴のまま屋敷の中を歩き出した。

メイド、佳代はその様子を静かに見つめて、怪しげな笑みを浮かべるのであった。

応接間に通された春斗は、シルヴィアが来るのを待っていてくれと、

紅茶を出され、部屋に一人になった。静かな応接間は古い時計がカチカチと一定のリズムを刻む音だけが響き、春斗の気持ちを圧迫する。本当の名前を教えたものの、顔を見せるのは初めてだった。いつもかけている眼鏡を取り外し、自分がジゼルだと分かるように髪も下ろす。

先ほどまでのやぼったさが嘘のように、小奇麗な学生に昇格した春斗は、出された紅茶に数度口をつけ、深く息を吐いた。

既に、慧のものと思われる着信が数回入っていたが、どうしてだか今日はシルヴィアに会いたいと思えたのだ。あの後彼女はどうしているのだろうか、少し気掛かりだった。

「あれ…」

時計が時間を示し、ボーン、と軽快な音を鳴らした瞬間春斗は目の前が眩むのを感じてテーブルに突っ伏す。反動で紅茶がこぼれてしまったが、そんな事を気にしていられないほど気分が悪い。

歪んだ視界で見えた先に、黒い清楚なフリルが見え、それが先ほどのメイドの服だと気づく頃には、春斗は意識を手放してしまうのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3101y/

怪盗ジゼルの慌しいお仕事

2011年12月10日02時48分発行